

わが子のあゆみ

2019.3
No.457
春風号
第70巻5号

3

【挑む、見守る、つながる】

岩邑中学校では、11月に伝統のマラソン大会が行われます。学校を出発し、岩村城下（NHK朝の連続ドラマ「半分青い。」の舞台となったふくろう商店街）を駆けぬけます。生徒は、自分の限界に挑み、保護者は交通誘導員として見守り、地域の方々も生徒の応援を通して深くつながっています。恵那市コミュニティスクールとして、地域と保護者と学校が一体となって教育を実践し子どもたちの成長を願い共に歩みます。

えな しりついわむらちゅうがっこう
恵那市立岩邑中学校



がんばる子らの

汗と笑顔と眼差しと

恵那市立岩邑中学校



城山清掃

力行は仁に近し(論語より)

岩村城の清掃ボランティアに参加し、地域に貢献することの大切さ、思いやりの心を学んでいます。



授業実践

学に志すの士は、当に自らを頼むべし(言志 巻録より)

志をもって試行錯誤をしながら仲間と話し合い、学びを深めています。



実践女子学園との交流

敬愛の二字は、実際の要道なり(言志 巻録より)

下田歌子先生の生誕地をたずねて、東京より実践女子学園の生徒が岩村を訪れます。総合学習で学んだことをもとに学園生に敬愛を込めて岩村の魅力を案内します。



総合学習(温故知新)

校訓「温故知新」故きを温めて新しきを知れば、以って師為るべし(論語より)

岩村には豊かな自然の中にある歴史や文化が息づいています。地域より講師をお招きして、岩村城女太鼓、雅楽、染め型紙、郷土料理、絵手紙、スケート、自然、歴史、弓道を学んでいます。



PTA親子クッキング

鎌介の族は水を以て産と為して、水の実たるを知らず。(言志 巻録より)

料理をしながら、作る楽しさと、作ってくれている人からの思いを学びました。毎日の家庭料理に込められた思いがいかに大事であったか知りました。



防災学習

薬を未だ楽しからざるの日に楽しみ、患を未だ患えざるの前に患うれば、則ち患死れるべく、楽しみ全うすべし。省みざるべけんや。(言志 巻録より)

「自分で、みんなで、災害に強いまちづくり」の担い手として、中学生として防災を考え、行動できるようにしています。

大縄大会



全校が見守る中、3分間で回数を競う

なかよしフェスティバル



今年は「新聞文字さがし」が人気

草取り大作戦



シニアの方とお話をしながらの草めき



給食交流会

シニアの方々とお話するってこんなに楽しいとは！

あいさつジャンケン



年末ということもあってケーキ、サンタのお面でジャンケン

百マス計算大会

シニアの方の力も借りて集中カアップ



山田川清掃

「中学生になったら僕たちも…」という憧れをもちます



イチゴの苗をシニアの方と植えました

フルーツランド

沿革

昭和49年、芥見小学校より分離、開校。昭和54年には、児童数1700人を超える。昭和55年に芥見南小学校（現岐阜市教育研究所）が芥見東小学校より分離。平成12年芥見東小学校と芥見南小学校が統合し、「芥見東小学校」となる。

周囲を山に囲まれ、緑あふれる景観の良い場所に立つ小学校。山からの水は山田川となって校舎の南を流れ、豊かな自然にあふれる小学校です。



岐阜市立芥見東小学校

【ぎふしりつあくたみひがししょうがっこう】



- 住所 〒501-3127 岐阜市大洞桜台1丁目2番地
- TEL 058-243-2291
- 児童数 368名



学校の教育目標

豊かな心で 元気いっぱい がんばる子 ～かしく なかよく たくましく～

学校のたからもの① アイデアあふれる 楽しい活動の創造

芥見東小学校の児童の特長は「人なつっこくて」や「たたるでえ」という意欲に満ちていることです。地域の方や来校者の方々にも、「とっても元気のよいあいさつをしてくれますねえ。」「よく声をかけてくれますねえ。」「う声をいただきます。この姿を生み出す源は、仲間と活動する楽しさを味わってきたからだと思います。」

例えば、「東っ子掃除」です。「東っ子掃除」とは、黙って・隅々・見つけ掃除・テキパキ・時間一杯の五つを大切にされた掃除です。この中の「時間」については、「もっとすごい掃除を生み出したい。」という子どもの意欲が、最近、形となって加わったものです。

縦割りの異年齢集団による活動に、「なかよしフェスティバル」というものがあります。その内容についても、毎年見直しながなされ、より楽しいブースを次々に生み出しています。また、高学年の委員会を中心となり、休み時間を利用して「大縄大会」を企画するなどの新たな伝統も生まれています。最近では、少しでも挨拶を楽しくするために、児童会の執行部がお面を付け、あいさつジャンケンをしています。このように、次々とアイデアあふれる楽しい活動を企画運営できることが本校の宝と言えます。

学校のたからもの② 地域が開かれた教育課程 「地域が学校だ！」

地域の方々や学校の教育活動にたいへん協力的で、校内では学べない学習をたくさん提供していただいています。

校舎の南を流れる山田川には、ホタルが生育しています。このホタルの生育に携わる地域の方のお話を聞いたり、小中一貫事業もかね、中学生と山田川を清掃したりしています。また、学校の近くには、里山があり、保全活動に携わる方と一緒に活動したり、お話を聞いたりしています。これらの活動を通して、児童は「郷土愛」を確かなものにしていきます。

学校のたからもの③ フラット・フォーム事業 「岐阜市初」地域ルームの誕生！」

東京大学牧野研究室と岐阜市教育委員会のモデル事業として、シニアと学校をつなぎ、児童に力をつける取り組みをしています。本年度は、その活動の拠点として「地域ルーム」が誕生しました。ここから、シニアと学校をつなぐ活動がどんどん生まれています。

運動会前に運動場の草をシニアの方々と一緒に取る「草取り大作戦」。本年度は、児童の発案で活動日数を延長し、運動場を美しくしました。さらに、シニアを招いて「給食交流会」を開催したり、児童の集中力を高める「百マス計算大会」でシニアの方にお手伝いをいただいたりしています。最近では、給食交流会後に、シニアの方と一緒に、「フルーツランド」を開園しました。こうした活動を通し、児童の活動意欲がどんどん向上しており、この高まった意欲が学力の向上にもつながるのではないかと期待しています。

養老町立養北小学校

【ようろうちょうりつようほくしょうがっこう】



- 住所 〒503-1304 養老郡養老町飯田265
- TEL 0584-32-0598
- 児童数 188名



沿革

我が校は、昭和45年(1970)4月、養老町立小畑小学校と養老町立多芸小学校が合併して現在の校名になり、来年度には、創立50周年記念事業が計画されています。校区は、養老町の東北部に位置し、水が豊かであることから、古くより栄えてきた地域であり、田園風景と歴史と文化の香りが漂う町です。学校運営協議会によるコミュニティ・スクールも3年目を迎え、学校と家庭・地域とがさらに連携した教育を目指しています。



学校の教育目標

「じょうぶな子 やさしい子 かしこい子」

合言葉『夢をもってつねに前進!そして笑顔!!』

学校のたからもの① 運動会のメイン種目「養北ソーラン」

毎年五月に運動会を開催しています。運動会では、子どもたちや先生、地域の方、保護者が楽しみにしている「養北ソーラン」があり、七年前より、地域の講師の先生から指導していただいています。低学年と高学年の二種類の振り付けがあり、その年の流行の動きを取り入れながら、技の難易度も上がってきています。今年も休み時間には、六年生が全校に呼びかけて自由練習の機会を作り、多くの子どもたちが楽しみながら踊りの練習をしました。グツと腰を下す姿勢、力強いかけ声で「どっこいしょ、どっこいしょ」「ソーラン、ソーラン」と体全体で表現する姿から、子どもたちの心が一致団結していることがよく伝わってきて、とても見ごたえがあり感動します。

学校のたからもの② 仲間と心をつなぐ「よさ見つけ」

日常生活や行事を通して、学級や他学年の仲間のよいところを積極的に見つけ、学級や全校に伝えていく取組を行っています。毎月一回水曜日のロング昼休みを利用して、縦割り班で遊ぶ「ほたるっ子」を実施しています。低学年にとっては、お兄さんやお姉さんと一緒に遊べることを楽しみにしています。上級生は下級生を気にかけて、面倒を見る良い機会となり、子どもたちが仲間のよさを見つけ、思いやりを育むうえで、大切な活動になっています。そのほかにも、十月に行われた「大縄大会」では、新

記録が出て跳び上がった喜び姿もあれば、一つの学年に回数を抜かれ、悔しい思いをする姿もありました。一方、お互いの頑張りを讃える姿もありました。養北小の子どもたちには、記録だけでなく、仲間のよさが見つけれられたときの「大縄大会」となりました。

学校のたからもの③ 一年間の集大成である「ゆずり葉集会」

三月には、子どもたちが一年間学習してきたことや、学級目標に向かって取り組んできたことを発表する「ゆずり葉集会」を開催しています。この集会には、保護者や地域ボランティアの皆様(登下校の見守り・学校の環境整備・授業や交流会の講師)にありがたこの気持ちを伝える場もあります。子どもたちが、上級生の発表を見ながら、「あんな上級生になりたいな。」という憧れをもって、養北小学校のよき伝統を引き継いでいきます。

学校のたからもの④ 自分から学習に向かう「子どもの姿」

毎日の授業の中で、学校の教育目標にある子どもの姿を育てています。ペアやグループ、スクランブルでの意見交流の場で、自分の考えを仲間にはっきりと伝えたり、仲間の考えと聞き比べたりすることで、自分の考えを広げ、深めることができる子どもたちが増えてきました。また、巧みにタブレットを操作して、自分の考えを伝える姿も出てきました。低学年は、植物や虫を写真撮影したり、インタビューの様子を録画したりして、意見交流に生かしています。高学年は、各グループの実験結果を送受信して考察を深めていくなど、情報通信機器のよさをうまく利用して、進んで授業に向かう子どもたちの姿が見られるようになってきました。仲間とかわりながら主体的に学び、これからの社会を生き抜くたくましい子どもたちを育てていきたいと思えます。

ゆずり葉集会



ほたるっ子
(縦割り遊び)



養北ソーラン
(低学年)



養北ソーラン
(高学年)



大縄大会



地域の講師
による授業



タブレットを使った
考察

タブレットを使った
意見交流



郡上市立和良小学校

【ぐじょうしりつわらしょうがっこう】



- 住所 〒501-4517 郡上市和良町沢728番地
- TEL 0575-77-2107
- 児童生徒数 77名



学校のたからもの① 五つの宝物を大切にしている取り組み

「誰もが居心地のよい、笑顔あふれる楽しい学校」、本校ではこんな学校にするために、五つの宝物を大切にしようとして取り組んでいます。一つ目は、「挨拶」です。挨拶を通して「さわやかな学校」にしようとして、児童会が中心になり活動しています。朝から気持ちよい挨拶が地域や学校に響き合い、やまびこのようです。校舎に入ると、各学年の教室を回って朝の挨拶をしている児童もいます。帰りの挨拶もそうです。下校時はバスの中から見えなくなるまで手を振り続けている児童もいます。

二つ目は「掃除」です。掃除を通して「美しい学校」にしようとして、異学年グループで活動しています。誰もが一生懸命自分の役割を果たし、学校をきれいにしています。ごみや埃がつかないように重い机も持ち上げて運んだり、汚れやぬめりのひどい排水溝も丁寧に磨いたりできます。「見つけ掃除」を始めて、隅々まで丁寧に掃除をしています。

三つ目は「授業」です。授業を通して「かっこいい学校」にしようとして、各学年が自慢の授業づくりをしています。聞く、話す、読む、書くといった学び方の基礎、基本を低学年で身に付け、学年が上がるにつれて、判断の根拠や理由を明確に示しながら、自分の考えを話せる姿をめざしています。そのために、つぶやきながら挙手をして、仲間に分かりやすく説明しようとして意識したり、自分の考えと比べて、うなずき、メモをとりながら聞こうと意識したりしています。また、こうした姿は同じ中学校区の小中学校で共通実

践することで身に付きつつあります。

四つ目は「歌声」です。歌声を通して「感動ある学校」にしようとして、児童会を中心に活動しています。六年生が集会で全校に手本を示したり、ペア学年による歌声交流で互いに評価し合ったりして、よさを認め合いながら表情の豊かな美しい響きをめざしています。九月には京都市立芸術大学オーケストラの伴奏に合わせ全校合唱をするなど、さまざまな行事で多くの方から感動の声をいただきました。

五つ目は「ボランティア」です。ボランティアを通して、人にも動物にも「やさしい学校」にしようとして、児童会を中心に活動しています。うさぎの世話、運動場の草取り、落ち葉拾い、カメムシ駆除等、児童が主体的にボランティア活動を見つけています。上級生が下級生を自然にサポートできたり、一年から六年までの児童が一緒に仲良く楽しく遊んだりできる姿から、「やさしい学校」に近づいていることを実感しています。

このように五つの宝物を大切にしている取り組みにより、「誰もが居心地のよい、笑顔あふれる楽しい学校」へと変わりつつあります。

学校のたからもの② 円滑な統合に向けた取り組み

郡上東中学校区では、本校と西和良小との統合に向けて、数年にわたって地域の合意形成が図られてきました。「地域あつての園・学校」という認識に立ち、交流に力を入れてきました。その取り組みを三つ紹介します。

一つ目は、「年十回の交流授業」です。バスで十分ほどの移動時間、しかも平地つながりで移動しやすいのが当校区の特徴です。この地の利を生かし、西和良小の児童が休み時間に和良小へ移動して、三時間目、給食までを共に過ごしました。また、今年度は新たな取り組みとして、和良小の児童が西和良小へ移動して交流を深めました。

二つ目は、「合同による校外学習」です。学年ごとに行えるだけ合同で実施しました。特に、五年の宿泊研修では、西和良小学校区にある鬼谷湖で力ヌー体験をしたり鍾乳洞を探検したりと、広がりゆく校区の特徴やよさを知ることができました。

三つ目は、「PTAの合同活動」です。各学年の親子活動を合同で行いました。また、六月の授業参観は交流授業の様子を見ていただきました。今年度は合同で本部役員会も開催しました。こうしたPTA活動を円滑にする取り組みが児童の安心につながります。

このように、三つの取り組みは、先に述べた「誰もが居心地のよい笑顔あふれる楽しい学校」に近づく大きな一歩となっています。

沿革

本校は明治6年(1873年)に下沢義校として開設され、数々の統合や改称を経て、今年で創立145年を迎えます。郡上市の東部に位置するこの和良地域は、飛騨川、長良川の両河川に挟まれた山間の町です。国指定天然記念物「オオサンショウウオ」の生息地であり、伝統ある祭りが脈々と受け継がれ、伝説が残る名勝地が多く見られます。そして日本一の和良鮎、長寿日本一、地元が誇るこれらの財産は、児童の生きた教材となり、地域唯一の小学校として多くの卒業生を輩出してきました。隣接する西和良小学校との統合を来年度に控え、児童やPTAが積極的に交流を深めています。

学校の教育目標

めあてをもってやりぬく子:自立
よりよい暮らしをつくりだす子:創造
助け合い、認め合う子:思いやり



オーケストラの伴奏による合唱



カメムシ採りボランティア

西和良小学校での交流授業



ひざつき掃除



つぶやきながらの挙手



うさぎボランティア



ペア学年による歌声交流



毎朝のハイタッチ挨拶



アフガニスタンに
ランドセルを送る活動



抹茶教室



作陶教室



土岐市あいさつデー



地域の福祉施設に
シルバーカーを寄贈

校内駅伝大会



肥田ヤングスターズ
花いっぱい運動



アルミ缶回収



登校時を利用した
通学路清掃活動



土岐市立肥田中学校

【ときしりつひだちゅうがっこう】



- 住所 〒509-5115 土岐市肥田町肥田2285-1
- TEL 0572-55-2539
- 生徒数 173名

沿革

本校は、やきもの（陶器）生産日本一の土岐市肥田町にあり、保育園、幼稚園、小学校が中学校を囲んで隣接する学園地域として位置しています。昭和22年に肥田村立肥田中学校として開校し、今年度で72年目となりました。地域、保護者の教育への理解や関心も高く、PTA活動も活発です。



学校の教育目標

自己を見つめ 他を思いやる心

学校のたからもの① 地域の歴史を知る茶碗づくり

「織部のこころを学ぶ」をテーマとし、歴史と伝統ある地場産業の美濃焼を体験的に学ぶことで、地域に対する理解を深め、ふるさとに愛着と誇りをもつ生徒を育てています。生徒は、美濃焼についての調べ学習、発表会を行った後、地域を代表する陶芸家の指導で抹茶茶碗を作成します。そして、焼きあがった抹茶茶碗を用い、地域の茶道家の指導により抹茶をいただく茶道教室に参加します。作陶および茶道教室には、PTAも運営に協力しています。毎年、緊張の中、自分で作った茶碗でいただく初めての抹茶は生徒にとっても好評です。作成した抹茶茶碗は、地域の文化祭に出品し、地域の方々にも見ていただいています。

学校のたからもの②

地域・市・世界への貢献を 目指した生徒会活動

本校の生徒会活動は、「挨拶」「掃除」「合唱」「ボランティア」の四つに重点を置いて取り組んでいます。取り組みは、毎日の挨拶活動、掃除活動や合唱の充実が始まり、地域と連携した活動に広がりを見せています。挨拶デーやMSJリーダーズ活動への参加、そして、アルミ缶回収の収益による地域の福祉施設への車いすやシルバーカーの寄付、土岐市や社会福祉協議会と連携したペットボトルキャップの回収や赤い羽根募金への参加協力などです。また、生徒会が全校生徒や地域にも呼びかけ、通

学路や地下道の清掃を行っています。

昨年度は、発展途上国（アフガニスタン）に自分たちが使用したランドセルを送る活動を行いました。保護者・地域の協力も得て、三十五個のランドセルをNPO法人を通じて届け、現地の担当者とスカイプを用いた交流をすることもできました。

学校のたからもの③

地域とともに歩むボランティア活動

肥田中学校は、「PTCA」を合言葉に、肥田町の各種団体とともに保幼小中で連携し、学校と地域住民等が力を合わせて「地域とともにある学校」づくりをしています。「地域に貢献する肥田中生の推進」を目指し、公民館を中心とした中学生ボランティア組織の結成もそのひとつです。多くの生徒が、公民館のボランティア組織である「肥田ヤングスターズ」として町の行事、活動に運営協力をしています。四月に希望者がボランティア登録をし、町民運動会、花いっぱい運動、青少年育成大会、公民館まつり等の運営に協力するなど地域住民との協働の機会ももっています。こうした活動を通して、地域の人々とのつながりと理解を深め、感謝と貢献の気持ちを持ち、積極的に地域活動、社会活動に取り組む姿勢が身に付いています。

また、今年度より土岐市教育委員会の指定を受け、学校運営協議会を立ち上げ、市内の中学校に先行し、「コミュニティ・スクール」としての歩み出しを始めています。

*PTCA＝学校・家庭・地域がひとつに

なつこ子どもを育てていくことを示す言葉
Parent(保護者) Teacher(教職員)
Community(地域) Association(組
織・団体)

学校のたからもの④ 駅伝大会と朝マラソン

クラスの団結の精神を養うとともに、基礎体力づくりを目的として毎年一月に校内駅伝大会を開催しています。この大会は、平成二十二年から始まり、今年で九年目となります。校区にある陶史の森（生活環境保全林を主とした公園）を会場に、全校生徒が全力で響をつなぎます。PTAや地域の方も沿道に立ち、生徒を見守り応援します。また、今年度より、基礎体力の向上を目指し、毎週水曜日の朝活動の時間を利用し、朝マラソン（ランニング）を始めました。年間走り続けることで確かな体力がつきつつあります。

岐阜県PTA連合会教育環境委員長 | 井藤 あい
多治見市立南ヶ丘中学校PTA



家族とともに

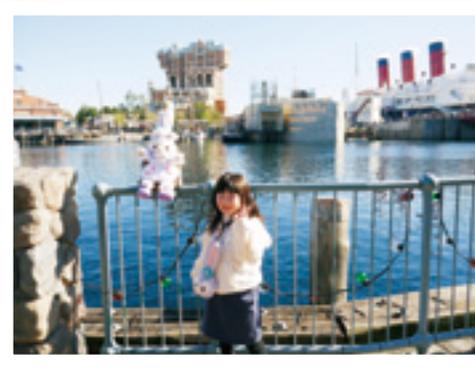
子どもが小学校2年生の時に、副会長としてPTA役員になってから今年で6年目。ここまで続けてこれたのは、支えてくださる多くの方と家族の理解でした。

役員2年目で、小学校のPTA会長をやることになりました。どうか悩み家族に相談すると「やってみればいいじゃない。」と言われ引き受けることになりました。しかし、実際にやってみると夜に出かける機会が多くなりました。そんなある日、子どもが「また母ちゃんいないの。1人で寝ないかんのかあ。」とぼつりとつぶやきました。この時後ろ髪がひかれる思いで出かけたのを今でも忘れることができません。

また、別の日には寝る前に「母ちゃん久しぶり。」と言われ、その言葉の意味がわかりませんでした。「一緒に寝るの久しぶりだね。」ということでした。家にいてもバタバタしていて、子どもが寝るときに隣にいないことが多く、寂しい思いをさせてしまっていたことに気付かされました。と同時に会長を引受けたことを後悔しました。色々なことがありながらも1年がたち、退任する前日子どもから「母ちゃんこれで終わりだね。最後まで頑張って。」と思いをよらないことを言われました。子どもはずっと私のことを見て応援してくれていた。私は目の前のことに必死で、まわりや家族のことがまったく見えていなかったことを反省しました。子どもには寂しい思いをさせましたが、母親として頑張る姿を見せられたことは子どもの成長につながったのではないかと思います。

家族の支え、なにより子どもの応援があったからこそPTA役員を無事に務め上げられました。多くの方と出会い、学び、貴重な経験をさせて頂いた6年間に感謝です。今子どもが中学生になり、真剣に打ち込みたいことを見つけ頑張っているの、全力で応援していきたいです。

次回は… 尾関 里佳さん



わが家の宝物

中津川市立落合小学校PTA会長
阿部 貴志

仲良し兄妹



わが家には、中学1年生の息子と小学校1年生の娘がいます。年が離れていることもありほとんど喧嘩する事はありません。休日には二人仲良くリビングで寝転がり、テレビを見て会話している姿を見るとホッとします。

お兄ちゃんは、妹がいなくて何処へいったの?と必ず私に聞いてきます。逆に妹はお兄ちゃんが合宿等で泊まりに行っていない時は、元気がなく寂しそうです。

そんな仲の良い兄妹がわが家の宝物であります。これから成長していくうえで、喧嘩する事も多々あるかと思いますが、仲良く・元気に伸びのびと育てられる事が一番の願いです。

最後に私が思う子育てで一番必要である事は、家族仲良く家族で色々話をすることはではないかと思えます。

わが子のあゆみ

2019.3 No.457 春風号



1 学校のたからもの
表紙 恵那市立岩邑中学校

9 わが家の宝物 阿部 貴志
10 リレーエッセイ ⑤ 井藤 あい

11 特集「被災地に学ぶ」交流活動2018
京谷 咲穂・市橋 桃寧・佐村 有基
室井 美洋・三輪 陽瑠・清水 康史
大前 若菜・山本 琳香・瀨 菜月
宮地 智子・北村 優羽

21 家庭教育応援団! ③⑤
岐阜県環境生活部環境生活政策課

23 「多様性尊重の教育」⑩
みんな、いっしょに 安田 和夫
25 話そう! 語ろう! わが家の約束
伊藤 明美・菅村 秀明

26 親子ではてな
27 保健室ノート 八木 美江
29 私の先生 ③⑤ 櫻井 文夫
31 子育て半生記 古田 真美

33 楽しい読み聞かせ ④
八百津町立和知小学校PTA

35 私が出会った1冊の本「続40」
富田 ひろみ・鷲見 恵史

37 子の思い 瀨 華音・瀨 尚果・松葉 みなみ
親の願い 藪下 圭一・原 多香子
42 教育の窓 小野 島孝・大前 正水
お話しクッキング 岐阜県学校栄養士会
43 ふるさとの伝承
岐阜市立東長良中学校

45 きらり! キッズ!
関市立武儀東小学校
47 夢中! 熱中! 我らが部活
岐阜市立精華中学校
49 私たちのPTA
大垣市立興文小学校PTA

機関誌「わが子のあゆみ」
平成30年度 春風号
第70巻5号 通巻457号
発行/平成31年3月1日 岐阜県PTA連合会
〒500-8824 岐阜市北八ツ寺町7
岐阜県校長会館内
電話/050(509)0211
FAX/050(509)0210
Eメール/info@gpta.com
ホームページ/http://www.gpta.com
編集/岐阜県PTA連合会広報委員会
「わが子のあゆみ」編集部
印刷/サンメッセ株式会社

特集 【被災地に学ぶ】交流活動 2018

東日本大震災から7年5カ月を経た平成30年8月2日～4日、岐阜県PTA連合会の「被災地に学ぶ」交流団(中学生11名、2村県PTA会長ほか引率3名)は、被災地宮城県東松島市立鳴瀬未来中学校、同宮野森小学校、石巻市立牡鹿中学校、公益社団法人みらいサポート石巻を訪ね、研修・見学をしました。

当時、小学校低学年だった中学生は、各々体験したことを学校や地域に広めて、防災活動に生かしました。これは11名の体験記です。

私の使命

岐阜市立藍川中学校三年
生徒会副会長 京谷咲穂

二〇一一年三月十一日。その時、東日本大震災は起きました。あれから七年……

交流事業に参加する前の私は、テレビに映し出された津波の映像、けたたましく鳴り響くサイレンの様子を見て、ただただ「恐ろしい」「怖い」と思うばかりでした。が、しかし、どこか遠い国の遠い世界で起きている、遠いことのように感じていたのも事実でした。

今回の交流事業で、私たちは宮城県石巻市立大川小学校を訪れました。きれいだったはずの校舎が、がれきと化していました。そこは、あの日のまま時が止まっていた。大川小学校では、八十四人の生徒と先生が亡くなりました。渡り廊下や壁、壁画は無残に崩れ落ち、津波の恐ろしさを肌で感じました。この場にいた先生や子どもたちはどんな思いで最期を迎えたのだろう。この地震や津波の被害を、ただ単に「恐ろしい」「怖い」と感じるだけでよいのだろうか。私にはもつと感じなくては、考えなくてはいけないことがあるのではない

だろうか。大川小学校を見ながら、そう強く感じました。

私たちの学校では、年に三回ほど命を守る訓練や防災の取り組みをしています。しかし、命を守る訓練の日は予告され、段取り通り過ぎていきます。防災の取り組みは、ボランティアのみ参加し全員で行う訳ではありません。大川小学校でも避難訓練をしていたはず。防災の取り組みも行っていったと思います。避難場所を確認し、過去の災害から自分の身の守り方を学んでいたと思います。それでも悲劇が起こったのです。避けられなかったのです。今の私たちの防災の取り組みは、「災害時にどのような行動をすればいいのか」「全員がいざというときに正しく判断できるのか」という問いに対し、十分応えられるようなものではないと思います。

岐阜に帰ってきた今、私は考えます。想定内の決められた「命を守る訓練」は、避難経路や集合場所を知る、放送を静かに聞くという点では十分意味があります。しかし、それ以外にも、例えば授業中、休み時間、下校時に震災が起きたらどう行動するのか、あらゆる想定で命を守る訓練をやるべきだと思います。また、学校だけでなく、家やスロープで起きたらどう行動するのか、どこへ行けばいいのか、

ら思えました。

次に訪れた大川小学校の校舎を見た時、私は大きな衝撃を受けました。二階建ての校舎が全て津波の波を破り、そして、大きな力によって校舎の壁も屋根も全てが壊されています。この小学校で生活していた児童の七十四名と先生十名が亡くなりました。津波がここまで来ないだろうという予測があったと聞きました。私は被災した大川小学校の姿を見ながら「本当にここまで津波が来たなんて今でも信じられない」という気持ちでしたから、その日、命をなくした子ども達や先生方も現実を受け入

助かる命、救える未来

岐阜市立藍川中学校三年
生徒会議会議長 市橋桃寧

今回の東日本大震災被災地との交流事業に参加した私の理由は、今思えば恥ずかしいとさえ感じます。東北地方で起きたこの地震のこと、また津波被害のことについて少しは知識として事前に学びましたが、それは文字であったり映像からの学びでした。さらに、この被災訪問が自分のためになるという利己的な思いもあつた

地域ぐるみで命を守る訓練をやるべきだと思います。震災は、いつ起きるのか、どこで起きるのかわかりません。東海地方では、南海トラフ大地震がいつ起きてもおかしくはないと言われています。そうした中で、私たちは、あらゆる想定をしながらいざというときに冷静に行動する力を、日常生活の中で身に付けなければならぬと思います。

大川小学校の悲劇をみんなが自分事として捉え、考え、行動する必要があると思います。そして、それを発信していくことが、この交流事業に参加した私の使命です。

かも知れないと被災地を訪れたことでは思えるようになれました。

私は、被災地訪問前には、被災地の人々は被災の傷跡が多く残る街で生活しているのではないかと想像していました。私達が最初に訪問した宮城県東松島市立鳴瀬未来中学校は、新築校舎であることに初めは驚きました。しかし、話を聞くと、東日本大震災による津波で東松島市の鳴瀬地区は特に大きな被害を受け、市内にあった一つの中学校が使用不能となり、二つの中学校を一つに統合することとなりました。統合校である鳴瀬未来中学校が平成二十五年に開校し、平成三十年に新校舎が建設され移転したと聞きました。私には防災設備が完備されている校舎が建設されている理由が分かりました。

二校目の訪問校は石巻市立牡鹿中学校でした。この中学校では、被災され家族を亡くされた方々が少しでも元気に生活していけるようにと中学生がソーラン節を踊る活動をしていました。全員が真剣に取り組んでいることが私にも伝わってきましたが、何故ソーラン節を踊って被災された方々に見てもらう必要があるのか、正直、私の心には落ちないものがありました。この時の私は、まだ被災された方々の気持ちが十分に理解できないと後か



れられないままで命を落とされたのかと考えてしまいました。

私は被災地を訪問し、一瞬にして何もかもを変えてしまう地震の恐ろしさを学ぶことができました。地震や津波によって簡単に形あるものが破壊されてしまうこと、そこに生きている人達の命が無残に奪われてしまうこと、そして、生き残った人々の生活すら奪い続けることを学びました。

だからこそ、防災訓練ではシェークアウト訓練のようなより実践的な訓練を学校や会社で実施し、私達一人ひとりが尊い命を守るようになることが大切です。さらには、被災された方々を強く支えていける安心な社会を作っていくことも必要だと考えました。

被災地での交流と学び

山県市立伊自良中学校二年

防災士 佐村有基

私は、この事業に参加し、被災地との交流の中で多くのことを経験することができました。被災地での防災対策はもちろん、他にも様々なことを学ぶことができました。

重要なのはこれらをいかに、各々が自分のこととして捉えるかです。他人事のように捉えられてしまうと、この先起こりうる大災害で簡単に命を失ってしまうことがあります。「防災」とは、災害によって人が死なないようにすることです。正直、私が発表した際、関心を持っている人は多いですが、それを自分のこととして捉えている人は少ないと感じました。

これらのことから、私は常に災害に対する考えを持つておくことで、災害時に、自分の命はもちろん、地域の方の力になれるように、率先して行動したいです。また、挨拶などを通して、地域の方々との関係を深め、地域が一体となって災害に備えられるように取り組んでいきます。

被災地で見えた二つの顔

恵那市立恵那東中学校三年

生徒会長 室井美洋

私が見た宮城県には、二つの顔がありました。一つは、自然豊かで美味しい食べ物があり、温かい笑顔あふれる宮城県。もう一つは、今もお、人々の記憶と土地に刻まれる東日本大震災

まず、防災対策についてです。被災地では想定される災害（東日本大震災であれば津波）に適切な対策を採っていました。例えば、学校を高いところに建設し、津波が入ってこないようにする工夫や、ライフラインが寸断されてもいように、校舎の屋上で太陽光発電を設置し、家庭科室ではIHを導入するなどの工夫がありました。私たちは、災害を想定して避難訓練をすることはありますが、このように学校施設自体が災害を想定して、設計されている工夫に驚きました。

このような災害に対しての備えの他に、私は、被災地の中学生の精神面の強さに驚きました。被災地の中学生達は家が流されてしまっても、地域の方へ挨拶をして回る姿や、共に笑顔で過ごそうとする姿がありました。大震災をはじめ、大きな波乱を経験していない私たちは「防災」という面だけではなく、人として見習うべきところもあると感じました。しかし、実際の被害というのは甚大なもので、私はそれを大川小で見えて実感することができました。大川小は学校管理下における戦後最大の悲劇とも言えるほど甚大な被害を受けた場所です。原型を留めていない校舎を見て声が出なくなりました。

私は今回学んだことを活かしたいと強く思

の被災地としての宮城県です。

二〇一八年八月二日。私は初めて宮城県を訪れました。かなりにぎやかなところという印象を受け、「被災地」という言葉とはとても遠いものを感じました。とくにそう思ったのは、その日に行った鳴瀬未来中学校との交流です。鳴瀬未来中学校の皆さんは、本当に明るくて優しい方々でした。また、サバ飯（サバイバル飯）作りを一緒に行った時には、他愛もない会話を交わし、方言は違っても自分たちと同じ中学生ということを改めて感じました。だから、本当に東日本大震災なんて起こったのかなと思いました。翌日に行った牡鹿中学校との交流でもソーランを見せてもらったり、お互いに質問し合ったりして、牡鹿中学校のよさをたくさん知ることができました。とくに、ソーランは恵那東中でも東中ソーランとして踊っているのが親近感もありました。牡鹿中のソーランは動きがそろっていてきれいでした。私はますます被災地を訪れているとは感じられなくなりました。

しかし、牡鹿中を訪れた後、私は被災地としての宮城を見ました。八月三日午後、私たちは高橋さんという女性から震災の起こった時の様子と高橋さん自身の思いを聴きました。

い、伊自良中学校の全校生徒と私の住んでいる山県市の地域の方々に向けて発表することになりました。

発表では、被災地に行ったきつかけから始まり、震災の爪痕、防災取り組みを経て個人の生活、学校、地域へ目指すべき防災とは何かについて発表させていただきました。その発表の中で、「甚大な被害から目を背けず、一歩ずつ前進していく被災地の方々に尊敬している。」と明言しました。地域の方々からは「中学生がこうのように考えていると、とても頼もしい。」といったたくさん感想を頂きました。しかし、



私はその時に聞いた「大川小学校の近くの避難所」の話がずっと胸に残っています。あの時亡くなった子どもたち、先生たちはもちろんその家族の方も、どれほどの悲しみを胸に抱いているのか。私が想像できるようなものではないと思いました。また、大川小学校跡を見て、ある物を見つけました。運動会で使う綱引きの綱です。私は改めて、あの日大川小学校にいたのは、当時の私たちと同じ小学生であったことを気付かされました。そして、もうこのようなことは二度と繰り返したくないと強く思いました。

一日目の夜、私たちは増子校長先生のお話を聴きました。私は増子校長先生が「中学生が避難所で行うべきこと」として「挨拶」や「掃除」を挙げられたことが強く印象に残っています。なぜなら、恵那東中で大切にしている「日常」の基礎だからです。避難所や震災時に大切なことは、決して特別ことではないことを学びました。だから、私たちの町や私たちの学校の仲間を自分たちで守るために、日常を大切にしようと思えました。また、皆にこのことを大切にしてもらえよう、防災リーダーとして動いていきたいと思いました。今回、この活動に参加させていただいたことは本当によかったと思います。ありがとうございました。

東日本大震災被災地中学校との 交流事業に参加して

大垣市立上石津中学校三年

生徒会長 三輪 陽瑠

この被災地交流事業に参加できて、本当に良かった。私が今なお強くこう思えるのは、現地で私達にたくさんのお話を教えてくれた温かい人々や、計画そして引率をくださったPTAの皆さんのおかげだ。この場を借り、感謝の気持ちを伝えたい。

そして、宮城を訪ねた三日間の貴重な体験の中で、最も心に深く刻まれているもの一つに、大川小学校がある。写真や映像で見るとは違い、その迫力に、恐怖に似たものを感じた。七年前のまま残されている校舎からは、かつて響いていたであろう明るい子ども達の声と、津波に奪われた命の音が聞こえてくる気がして、思わず耳を塞ぎたくなった。誰にも止められず、いつ何がどうなるか分からないのが自然災害だと、改めて感じさせられた。

こんな中で、復興のため前を向いて生きる人達にもたくさん出会った。誰もが思い出したくもない記憶だったのではないかと思う。それでも初日は、鳴瀬未来中学校へ行きました。現地の中学生とともに活動することで親交を深め、様々な思いや考えに触れることができました。特に印象的だったことは、現地の生徒の話す言葉の中に、震災の悲しみを忘れようとするのではなく、その経験を未来に伝えていこうとする力強さを感じたことです。そんな彼らの姿を、私も伝えていかなければならないと強く思いました。その後訪問した宮野森小学校では、津波で流されてしまった後に新しく建て直された校舎を見学しました。とてもきれいな校舎で、周りの自然も美しいところですが、震災からの復興に向けて建てられたものだと思うと、この場所からも震災の経験を糧に進んでいこうとする力強さを感じました。

二日目の牡鹿中学校の訪問では、震災時に使用した、プライベートルームや簡易トイレを造りました。とても便利なものだと驚く反面、このような便利な物があつたとしても、自由を奪われ、これまでの当たり前前の生活ができなくなってしまう人が数多くいるのだと考えると、胸が張りさけるような思いでした。午後から訪れた大川小学校は震災当時、全校生徒と先生を含め全八十五名中八十名が亡くなりました。助かったのはたったの五名です。震災の恐ろしさを伝えるために残された校舎は、建物の

も、涙ながらに「同じ思いはしてほしくない」と伝えてくれた。また、宮城の中学生と交流ができたことも、私にとって嬉しい出会いだった。鳴瀬未来中学校、牡鹿中学校の生徒と交流をしたのだが、どちらの生徒も明るく気さくに話しかけてくれた。七年前の地震のことは一切感じさせず、まるで何もなかったような普通の私達と同じ中学生だった。

だが、彼等のする話には「経験」という重みを感じた。そう考えると、あの明るさは、自分達の町をより早く復興させるためのものだったのかもしれないと思った。被災当時、中学生は避難所や地域の中で大きな役割を果たしていたと聞いた。掃除をしたり、あいさつをしたり、壁新聞を作ったり。当たり前だと思いかもしれないが、でも、被災直後の精神的にも身体的にも辛い時に、こんなことができるだろうか。今の私達には想像もできないくらい難しいことであることは確かだ。そんな状況を明るく振る舞うことで乗り越えてきた彼等を私は尊敬する。

こうして、私は多くのことを学んだ。学校で発表すると、「どんなところをやったの?」「何してきたの?」と聞いてくれる子が多くいて、本当に嬉しかった。震災の恐ろしさも人の温かさも改めて教えてくれた宮城の人々に、私が恩返

原形を留めていませんでした。あの場所には、震災の恐ろしさがしつかりと残されており、私たちが震災を絶対に忘れてはならないというメッセージなのだと感じました。

東日本大震災では、家族や大切な人を亡くした人がたくさんいます。現地の方々に会うと、その人たちは、私たちよりも家族や人、そして時間を大切にしていました。まず、私たちにできることは、大切な家族、仲間を守るためにはどうすべきかを日頃からもっと考えることです。被災地の方々は、震災のメッセージを残してくれています。私は今回の経験をともに、被



しをする方法は、この記憶を広めることだと思ふ。そして、私達中学生には何ができるのか考へ続けることだろう。自分には関係ないと思っている人も、一度考えてみてほしい。私達のために辛い思い出を伝えようとしてくれてる人がいることを。復興のため、前を見て明るく進もうとしている人がいることを。そうしたら、自分にできることは何なのか、為すべきことは何なのか、自ずと答えは見えてくるはずだ。

被災地から学ぶ

北方町立北方中学校三年

生徒会長 清水 康史

東日本大震災からもうすぐ八年が経とうとしています。その頃小学一年生だった私ですが、テレビを通して見たあの惨劇を、今でもしっかりと覚えています。それから八年間、被災された方々は今どうしているのだろうか、心のどこかで考えている私がありました。そこで今回の被災地に学ぶ交流活動の話を聞き、迷うことなく参加を希望しました。この体験を通して、現地ではしか知ることのできない被災地の思いや考えに触れ、多くを学ぶことができました。

被災地のメッセージを多くの人に広め、自分ができることは何かを追求し続けていきたいです。

まず今の私にできることとして、地域の防災訓練に積極的に参加し、被災地から学んだ防災対策を自分の地域に取り入れていきたいです。そして、実際に震災が起きた時に一人でも多くの命を救うためにはどんな行動をとることが最善かをさらに追求していきたいと思っています。貴重な経験ができたことに感謝しています。ありがとうございます。

「災害」そのとき、 私たちに何ができる?」

可児市立東可児中学校

二年 大前 若菜

今回宮城県へ行き、この「被災地に学ぶ」に参加できたことは、私にとってとても良い経験になりました。お話を聞く中で、避難生活を余儀なく過ごすことになった中学生が、進んで掃除をしたり明るく挨拶をしたりすることで、避難する人々の心の支えになったことを知りました。いつ起こるか分からない災害に備え、私たち中学生ができることは何でしょうか。

私の住んでいる地域では、高齢化が進んでき

ており、夏祭りや清掃活動などで私たち中学生がボランティアに参加しています。普段から地域と関わる機会を多くすることで、もし災害が起きた時に中学生でも積極的にボランティアができると思います。また、私が防災訓練のボランティアに参加した際には、防災に関わるチームの組み立てや防災グッズコーナーを作りました。この経験で防災について学ぶこともできたので、これからも地域とのかかわりを大切にするためにもボランティアを沢山していきたいです。

震災から七年たった被災地は、私が想像したよりも復興していました。でも、都心から離れるにつれてまだまだ復興が必要だと思うとともに、東日本大震災がとて大きな災害だったということを感じさせられました。そのような気持ちで臨んだ鳴瀬未来中学校と牡鹿中学校との交流。私は同じ年ぐらいの人たちはいつたいたいように震災と向き合い、現在どのように防災に取り組んでいるのかとても気になっていました。交流した中学生の人たちはみんな明るく元気で、とても前向きでした。本当にこの人たちが震災にあったのか疑うほどでした。

震災を体験した今、全員が自分にできる事を真剣に考えていました。テントを組み立てたり、サバイバル飯（通称サバ飯）を作ったりする活分の防災意識を高めることができました。

地震発生時刻や津波到達時刻で止まった時計や、当時の姿のまま残っている大川小学校を実際に見ると、震災の恐ろしさを心から感じる事ができました。しかし、震災から八年経った今、私たちの周りでは震災の恐ろしさが忘れられようとしているように感じています。震災はいつでも起きてもおかしくありません。だからこそ、一人一人が普段から備えることが大切になると思います。また、中学生でもできることがあると知り、自ら動くことも大切だと思います。

今回の交流事業で学んだことや感じたことをこれから多くの人に知ってもらい、防災意識の向上につなげていきたいと思っています。そして、支えられる中学生ではなく、支える中学生が増えていくと嬉しいですね。

震災と地域のつながり

関市立緑ヶ丘中学校三年
全校教科係長 額額 菜月

私は夏休みに東日本大震災被災地中学校との交流事業に参加しました。この事業を通して、

動を一緒にさせていただきました。

今回の研修を通して、東日本大震災という大きな震災を絶対に風化させてはいけないと思いかけてくるかわかりません。もしかしたら明日かもしれない。私はこの大震災での教訓を生かして、同じ悲劇を繰り返さないように防災について学び、沢山の人が災害と向き合うことが、防災・減災の第一歩だと学びました。

防災への意識

関市立緑ヶ丘中学校三年
生徒会執行部員 山本 琳香

私は、この交流事業に参加して宮城県へ実際に行き、本当に地震や津波の被害に遭ったのかと思うほど復興している所や、八年経った今でも復興するために努力している所を多く見ることができました。その中で、鳴瀬未来中学校や跡地見学、語り手さんの話を通して二つのことを学びました。

一つ目は中学生でもできることが多くあるということです。鳴瀬未来中学校へ行くと、七人の生徒がとても素敵な笑顔で迎えてくれました。地域と生徒たちとの温かいつながり、被災者同士の強い絆にふれることができました。それとともに、被災地を視察したことで災害の恐ろしさを目の当たりにしました。

私たちははじめに鳴瀬未来中学校へ行き、岐阜県と宮城県の中学生が、災害に対して行っている活動や災害時の活動について交流しました。私の住む地域にも地域で防災訓練を行うことがありますが、宮城県では中学校と地域が共同で災害時により近い形で訓練を行っています。そして、そのことで地域の団結力を高めていきました。

また、どの地域でも私たち中学生や高校生は働きに出ていく親や遠くへ行く大学生の代わりに地域を守っていく立場にあります。実際に、災害時はこうした中学生や高校生が活躍したそうです。例えば、避難場所での物資運搬や障がい者、高齢者への手伝いや配慮、地域の清掃活動などです。私と同じ中学生がリーダーとしての自覚をもって働いたことで、地域の方の気持ちも明るくなったそうです。そして、こうした場面で地域の方が最も嬉しく感じたのは「いつも通りの挨拶」だそうです。何気ない挨拶ですが、元気いっぱい素直な姿は地域の方を勇気付け、希望を見せてくれたそうです。この行動は地域の多くの方の生

た。少し不安があったのですが、この笑顔で不安が吹き飛ばすような感じがしました。地震・津波の被害から恐怖や不安に包まれた人が避難所に続々と来る中、中学生は笑顔で挨拶をしたそうです。きっと、私がそうだったように、笑顔で元気な挨拶が避難された方の不安を和らげたいと思います。その他にも瓦礫の掃除や物資の運搬など私たち中学生でもできることが多くあることを学びました。

二つ目は防災への意識がいかに大切かということ。語り手さんの話から地震や津波の恐ろしさを実感するとともに、普段から防災の意識をもつことの大切さを学びました。震災当時には大津波警報というものが発表されたそうです。しかし、この警報を今までに聞いたことがなく、津波というものも見たことがなかったため、何が起るのか分からなくて大きな不安に包まれたそうです。私たちに当時の心境や状況を話しながら涙する姿も見られ、「この涙は震災当時やその後の苦しみや悲しみを指しているのだ」と感じました。普段、私たちが行っている「命を守る訓練」も防災への意識を高めるものです。牡鹿中学校の増子校長先生の話の中にあつた、「自助・共助・公助」という言葉。この言葉は防災にとって大切なことだと心に残りました。このように主に二つのことを学び、自

きがいとなりました。

次に牡鹿中学校へ行き、伝統文化について交流しました。地域を活気付けるために伝統行事である太鼓やソーランに学校全体で取り組んでいました。そして、周辺地域へ地元行事の魅力を発信していました。この中学校へ行ったとき、地域の仲がよくつながりが強いと感じました。災害を経たことで周りの人や地元への感謝の気持ちを再認識したため、伝統文化の継承に努めているそうです。

災害後には、情報・食料・水などの短期的な



課題と、モラル・安全確保・ルールの徹底などの長期的な課題が明らかになりました。また、短期的な課題を解消してくれるのは他県などから集まるボランティアの存在です。ボランティアアセンターを知り、活用してくれる人が増えると嬉しいという話を聞きました。

復興に向けて私たちにできることは、被害からの教訓を受けて忘れてはいけないこの出来事を伝えていくことです。「かわいそうだ…」と哀れむのではなく、災害にもっと関心を持ち、経験から得た知識を生活に生かしていくことが被災者の方々の大きな願いです。だから、この事業で学んだことを伝えていくなど、私にできることをしていきたいと思えます。

被災地と岐阜の違い

多治見市立小泉中学校三年
前期生徒会副会長 宮地 智子

新聞やニュース等のメディアで報道されていた二〇一一の悲劇は、どうしても「津波」「マグニチュード九・〇」といった、極端ですが、被害の大きさについてしか分かりませんでした。被災者の思いは報道の一部やめつたにない

とは、地震や土砂崩れ等です。現実にはあり得ないと思っていることが起きてしまったのが東日本大震災です。次はこの中部地方かもしれない。しかし、災害が起きてしまった時は、地域の人と協力し、私たち中学生が率先して動かなければならないと教えていただきました。中学生になってからは減ってしまった地域との交流を増やしていくことが、今後の課題だと思いました。

東日本大震災被災地中学校との交流に参加して

多治見市立小泉中学校三年
生徒会長 参加当時ボランティア委員長 北村 優羽

震災があった当時、私は小学一年生で、ただテレビ画面から流れる映像を見て驚くことしかできませんでした。しかし、今回の学習で「中学生にできること」がたくさんあると分かりました。例えば、地域とのつながりを大切にすることです。宮城の中学生のみならず、避難訓練を地域の人も一緒に進めたこと、伝統を受け継いでいます。私は、このような大きな活動はすぐにはできなくても、

長時間の特集番組で報道されましたが、それだけではなかなか「東日本大震災」というものが自分の住んでいる国で起こったのだと思えず、大変だなあとどこか他人事のようにとらえていました。

だからこそ、自分の足で被災地を訪れ、自分の目で現状を見て、自分の耳で被災者から直接当時の様子や苦難を聞くことで、メディアの情報では分からなかった何かが見えてくるのではないかと、思いました。岐阜県は海なし県ですから、津波なんて別世界のような話です。私たちの訪問を通して、地域の人たちの防災意識をより高めることにつなげたいという思いで応募しました。

実際に訪れてみて、まず思ったことは「イメージと違う」です。失礼な話になりますが、今まで何度か見てきた震災についてのニュースは、がれき撤去中の映像ばかりで、七年経った現在でも復興ができていないと想像していました。しかし、地域の方々の話を聞き、資料を見せられていくと、ここまで街を回復させるのに、どれだけの苦労があったのだろうと考えさせられました。また、広島原爆ドームのように震災遺構として残されている大川小学校や、街中にある全て同じ形をした真新しい住宅、いまだに仮設住宅の外に駐車されている自動車等々を見

まずは、あいさつを始めようと思い進んで行っています。あいさつをするだけでも、ちょっとしたつながりは生まれます。このつながりを広めていけば、いざというとき、互いに助け合えると思います。

また震災があった瞬間のことを聞いたり、実際に足を運んだりしたこと、震災の恐ろしさを改めて感じました。「もつとこうしていれば：助かったかもしれない：。」という声も聞きました。震災が起こると、焦ってしまい「自分は大丈夫だ。」という正常性バイアスがはたらいてしまうそうです。そうならないためにも、防災の知識を深めたり、避難生活のことを知ったりすることは大切だと思います。少しでも不安を少なくするためには、「知る」ということがとても重要なのだと分かりました。

この研修が終わってから、学校で、学んだことをスピーチしました。震災から七年経った今でも仮設住宅に住んでいる人がいること、牡鹿中学校のみなさんのサムライソーラン活動などを発表しました。真剣に話を聞いてくれました。また、夏休みの作品として学んだことをまとめたノートを作成しました。それにも目を通してくださった人が多くいて、少しでも震災に関心を持ってもらえたと思っています。

て、地震と津波による恐怖という心の傷の深さや被害ははかり知れない、いや、こうやって被災地を訪問しただけで、震災を経験した人々の気持ちを分かたつつもりで考えようとしてはいけないと思えました。

今回、私たちと交流して下さった宮城県の中学校の生徒や先生方は口をそろえてこうおっしゃいました。「地域の人との交流を大切にしなければならぬ」

災害はいつ、どんなことで起こるか分かりません。津波という危険がない岐阜県で恐れるこ



今後は、もつと具体的な防災活動を行っていったらよいと思います。例えば、地域のハザードマップの確認をできる機会をつくったり、防災グッズについて知ることができるといことがあったりしたら、いいな、と思います。学校や地域でそのような活動ができれば、きっと震災が起こっても心強くなれるし、役に立ちます。

いざというときに信頼して、助け合える関係性、中学生が進んではたらくことがとても大切なのだと感じました。



家庭教育応援団！「岐阜県青少年健全育成県民大会」編

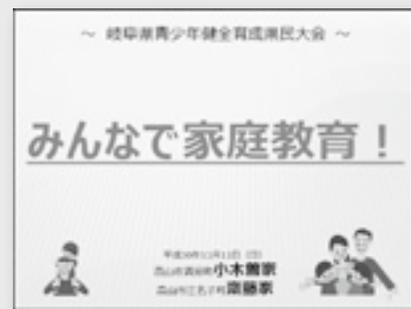
「岐阜県青少年健全育成県民大会」とは？

岐阜県青少年健全育成県民大会（岐阜県、公益財団法人岐阜県青少年育成県民会議等主催）は、全ての子ども・若者の健やかな成長を願う県民のつどいです。毎年十月の「子ども・若者育成支援強調月間」に合わせ、県内各地区で開催されています。

今年度は十一月十一日（日）、高山市民文化会館において開催され、家庭の日啓発図画の表彰など各種表彰、各種取組報告に続き、家庭・学校・地域社会が一体となって進められている地域ぐるみの実践活動などの具体的な事例が発表されました。飛騨圏域の実践活動発表として、小木曾さんご一家（高山市在住）と齋藤さんご一家（高山市在住）が、学校ぐるみ・地域ぐるみで子どもを温かく見守る「みんなで家庭教育！」をテーマに発表されました。今回はその様子を報告します。

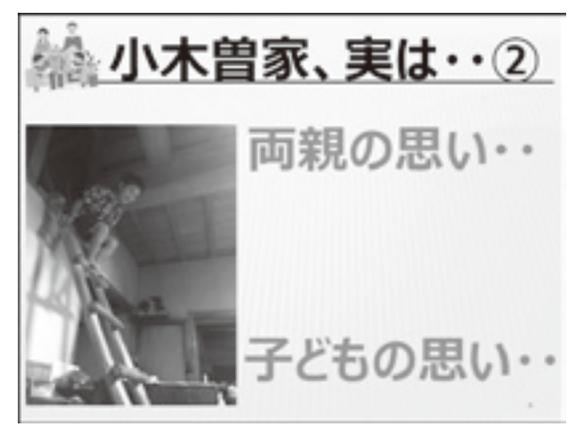


立ち見ができるほどの大盛況でした。（408名参加）

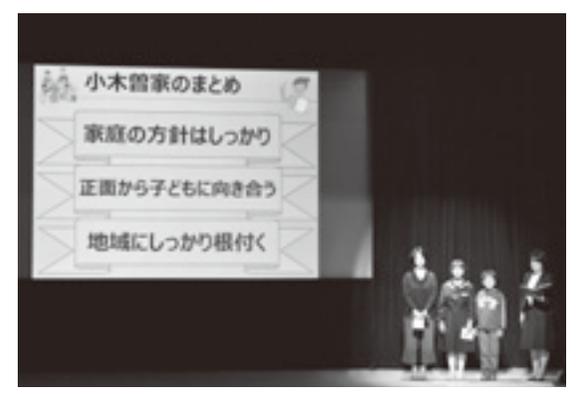


小木曾さんご一家（高山市）

夫婦と四人のお子さん、六人家族の小木曾さんご一家。イターンで十五年前、飛騨清見に引っ越され、この地で生活を始められました。「与えられる情報よりも、自然の中で遊ぶことや自分で考えて判断できる子になってほしい」という両親の教育方針のとおり、テレビやゲームなしで、家族間のコミュニケーションを大切に生活していることが発表されました。また、「まず家の手伝いをする」という方針のもと、子どもたちがそれぞれ「米とぎ」や「えさやり」を責任もってやり遂げています。長男の稔さん（小四）は小学校年生の時から、新を割



つて新風呂を沸かす役割を果たしています。そんな稔さんが新風呂をうまく沸かすコツを紹介した時には会場から自然に拍手が起きました。母美智代さんによると、見知らぬ土地での子育てではあったけれど、近所の方々がいつも子どもたちを気にかけて言葉をかけてくださったり、成長を一緒に喜んでくださったりすることが本当に励みになったそうです。温かい地域の中で、両親の確かな教育方針のもと、お子さんたちが、明るくのびのびとたくましく育っている様子が会場の参加者と共有できる素晴らしい発表でした。



齋藤さんご一家（高山市）

齋藤さんご夫妻は「家庭こそ教育の原点。家庭の中で甲斐性のある子に育てたい」という願いのもと、娘ちひろさん（小五）を育ててみえます。母沙保里さんが、今年度江名子小学校の母親委員長を務めることになったことをきっかけに、学校の保護者とも「子どもたちの自立を目標に、甲斐性を育てていく大切さ」を共有し、学校ぐるみの取組を始められました。

年間を通じた取組を（ ）のように計画され、齋藤家ではゴールデンウィーク中、ちひろさんが「衣類たみ」に挑戦しました。取組を通して、普段母親がしていることの裏には様々な家族への気配りがあったことに

江名子小学校の取組

自分の身の回りの衣・食・住に
関わってみる

- 第一弾「衣」・・・ゴールデンウィーク中
- 第二弾「食」・・・夏休み中
- 第三弾「住」・・・冬休み中

「一家族の発表を通して

小木曾さんご一家、齋藤さんご一家は環境や毎日の出来事が違っても、「わが子にこんな力をつけたい」「こんな風に育てたい」という強い気持ちをもって、保護者が主体的に家庭教育を行ってみえることが共通点であると感じました。

また、家庭内だけでなく、学校で他の家庭と一緒に、また地域の皆さんから温かく見守られながら、「みんなで家庭教育」をしてみえる地区全体の温かさを感じました。すばらしい発表をありがとうございました。



ちひろさんが気づき、自分でできることは自分でできるようになった、手間をかけないよう考へて行動できるようになった、父裕輝さんはわが子の成長の様子をこのように発表されました。

また、沙保里さんは、各家庭から提出された実践カードに手描きのイラストや解説をつけて「ええなあこの子 江名子の子」（母親委員会便り）にまとめられています。便りを手にした保護者の皆さんは他の家庭の様子も参考に、わが家の家庭教育のあり方をさらに考へられています。学校全体の家庭教育力向上をねらいながら、ご自身の家庭でも工夫ある取組を展開される実践家、齋藤さんご一家のすばらしい発表でした。

今年度も「家庭教育応援団」シリーズをご覧いただき、ありがとうございました。

今年度も県内多くの園・学校・市町村・企業等において、充実した家庭教育学級が開催されました。子どもたちの健やかな育ちのために、家庭教育学級を企画・運営していただいたリーダーの方々、家庭教育学級に参加し、学びを深められた保護者の皆様、本当にありがとうございました。

県のホームページでは、家庭教育に関する情報を発信中！ぜひご覧ください！

岐阜県 家庭教育学級

- 環境生活政策課 ☎058-272-8752（直通）
西濃県事務所 ☎0584-73-1111（内線219）
中濃県事務所 ☎0575-33-4011（内線210）
可茂県事務所 ☎0574-25-3111（内線208）
恵那県事務所 ☎0573-26-1111（内線209）
飛騨県事務所 ☎0577-33-1111（内線235）

お気軽にご相談ください！
家庭教育学級や企業内家庭教育研修等、内容から講師選定までご相談に応じます。



障がいのある卒業生とそのご家族の絆

岐阜聖徳学園大学教育学部特別支援教育専修 教授 安田 和夫

毎年行われる特別支援学校の
新成人を祝う会

今年も、成人の日の一週間後の日曜日、長良川国際会議場で、岐阜特別支援学校の同窓会があり、三〇〇名を越す参加者で大いに盛り上がりました。その中で、新成人を祝う会が必ず挙行されます。スーツや晴れ着を着飾る新成人は、大勢の卒業生やそのご家族、恩師の先生方の前に立ち、自分の名前と頑張っていることを報告し、一学年下の後輩から花束をもらいます。今年の新成人の中には、私が当校に校長として赴任した時に、小学部に在籍していたメンバーも多く、とても懐かしく、また、一人ひとりの成長ぶりに眼を見張るばかりでした。

成人式といえば、地元の公民館や文化センターなどに一堂に集まって行うものと思いがちですが、特別支援学校卒業生の場合、知っている仲間がいなかったり、ご家族や支援者の同行、同席が想定されていないために、実質上認められていない場合もあり、ハードルが高いことが多いのです。そのため、親の会、支援団体や、出身

校である特別支援学校が主催する成人を祝う会に出席することが多いのです。

席上交わされる話題は様々ですが、今年度は、余暇活動の話で盛り上がりつつありました。あるお母さんから、ダンスを一緒に踊ってみませんかとの案内がアナウンスされ、それがきっかけとなり、私のテーブルでも、職場と自宅の往復で、何か取り組ませたいけれど、親自身があげられることはなかなか見当たらず、本人が興味を示してくれるなら、是非ともダンスもやらせてみたいというお母さんがおられました。どのご家庭でも、卒業後の余暇活動は、共通の課題であり、「我が家の場合はい」と、情報交換が始まりました。

こうした話題は、障がいのあるお子さんを育てておられるご家族でないとわからないものであり、同窓会の席でのこうした情報交換は、本人にもご家族にもかけがえないものになっています。しかし、この同窓会にも、三十歳を越えるあたりから、目に見えて出席者が減っていきます。おそらく、出席者の中に、お世話になった恩師も同期の仲間も次第に少なく

なっていくことや、ご家族も高齢化され、同行できなくなることも想像できます。どのように、本人やご家族は、年齢を重ねる中で、コミュニケーションを維持しているのでしょうか。地域の中に、受け皿となるコミュニケーションがあればよいのですが、なかなか厳しいものがあるようです。

特別支援学級生の卒業生の絆

私は、昭和五十四年四月、大垣市立南中学校に初任者として赴任しました。できたばかりの新築の校舎への引っ越しの作業が赴任早々の仕事でした。私が担任する特別支援学級(当時は「福祉学級」と呼んでいました)も、ピカピカの新築校舎に入るようになりました。

担任したのは新一年生八名の学級でした。軽度の知的障がいがあり、うまくコミュニケーションをとることができないとか、読み書きが苦手とか、一人ひとり違う困難さがあったものの、どの子も素直で、毎日毎日、一生懸命学校生活を過ごしました。

その八名は、三年間学んだ後、ほとんど就職していきました。多

くの中学生が高等学校へ進学する中、障がいのある彼らが、真つ先に社会人になっていったのでした。はじめは、仕事の内容にとまどうこともありましたが、八名の卒業生は、根気強く真面目に働き、休まず会社にも行きました。その誠実な姿を認めてもらい、長年働かせていただくことができました。しかし、バブルもはじけ、不景気の波が一気にやってきました。そして、多くの会社で、リストラが始まりました。象徴的だったのは、何名かの卒業生がお世話になっていた繊維・縫製関連の会社の倒産、廃業でした。職を失う卒業生が続出しました。彼らはすでに四十代になっていました。

K男もその一人です。長年勤めていた縫製会社では、紳士服の襟をプレスする仕事を担当させていただき、社長さんにもとてもかわいがっていただいていたのですが、アジアの諸外国に仕事を奪われ、会社は廃業となってしまい、ハローワークや知人を頼っての会社探しが始まりました。幸運にも、数ヶ月後、なんとか二つめの会社で働くことができました。しかし、

喜びもつかの間、不幸が続きます。そのK男の両親は次々と他界してしまい、一人暮らしを強いられることになったのでした。毎晩の食事は、スーパーの十七時からのタイムセールで買ってくるお弁当でした。二つ目の会社が見つかるまでの間は、このお弁当が一日一食の命をつなぐ食事でした。

そんな大変な思いで過ごしているK男には、家族同様に心配してくれるM男という先輩がいました。彼は、K男と同じく、南中学校の福祉学級卒業生で、一年先輩です。卒業と同時に、地元の機械製造会社に就職するとともに、定時に通い、高校卒業資格も取得し、頑張っていました。

彼は、K男の窮状を知り、時々、電話をかけて、自分の母親が作ってくれる温かな食事を一緒にとるように声をかけました。また、担任であった私にも、K男の近況を伝えてくれたり、K男自身に、「先生も心配しているから連絡をとるように」と促したりするなど、気遣いのできる面倒見のよい先輩でした。

障がいのある彼らが生きていくのは大変なことです。仲間のこと

を思いやる余裕ありません。しかし、M男は、口癖のように「助け合って生きていかな」と、先輩一人ひとりに思いを寄せ、連絡を取り続けてくれていたのです。

K男にとって、M男は兄のような存在だったに違いありません。時には、厳しく、時には温かく導いてくれたM男がいたからこそ、なんとか、生き抜いてきたということでした。

そういえば、六、七年前のことだったでしょうか。M男が中心になって、卒業生の食事を計画してくれました。小さな会で、全員、味噌カツ定食を注文してのシンプルな内容でしたが、集まったメンバーはみんなM男に尊敬と感謝の気持ちを持ち、彼の話を耳を傾けていました。ここに、コミュニケーションが育っていることを確認した私は胸を熱くし、私自身もできる限りの事はしたいと心に決めました。

早すぎるM男の死を悼む

今年の一月、K男から電話がありました。M男が亡くなったというのです。突然の訃報にびっくりしました。正式な病名はわからな

いけれども、入退院をしていたとのことでした。K男は、自分たちの同級生で声を掛け合って、みんなで仏前にお参りに行きたいとのことでした。

自分たちのコミュニケーションを大切にしたいと願って心尽くしてくれたM男のことを残されたメンバーはいつまでも忘れることはないと思います。地域の中でも、職場の中でも、孤立しがちな仲間が肩を寄せ合って生き抜いている姿は、たくましく美しく、障がいの有無の彼方にあるものに思えます。

今一度、考えたいのです。頑張らないといけないのは彼ら自身なのででしょうか。彼らがつくる心の居場所となるコミュニケーションは、これからもずっと必要かもしれませんが、同時に、地域社会がもっとしなやかに変革することで、その負担は減っていくように思うのです。

親子ではてな



Q1 ひな祭りで食べる「3色ひなあられ」に込められた思いとはなんでしょう？

- ア** 将来の夢が叶いますように
- イ** 1年間を健康に過ごせますように
- ウ** 美しい女性に育ちますように
- エ** 1年間を幸せに過ごせますように



Q2 春になると「ホーホケキョ」と鳴くウグイスですが、別名をなんと呼ぶでしょう？

- ア** 春鳴鳥
- イ** 春呼鳥
- ウ** 春来鳥
- エ** 春告鳥



応募方法

応募者は、はがきで、3月末までに下記の宛先へお送りください。

(1人1枚・当日消印有効)

※クイズの答えは1問だけでもOKです。

宛先 〒500-8824
岐阜市北八ツ寺町7
岐阜県校長会館内
岐阜県PTA事務局
「わが子のあゆみ編集部」

なお、応募はがきには「わが子のあゆみ」への感想・意見やなぞなぞの問題と答え、逆さ言葉などを記入してください。

●3月号クイズの答え

●郵便番号・住所
学校・学年・氏名
保護者名

●「わが子のあゆみ」
への感想・意見

●「なぞなぞ」の
問題と答え

●逆さ言葉

1月号クイズ答え

Q1 (エ) **Q2** (ウ)

1月号のクイズ当選者

赤堀れいき (岐阜市)	柳瀬 綺音 (不破郡)
中村 桃寧 (岐阜市)	吉田 悠矢 (関市)
木戸 綾乃 (羽島市)	鈴木 麻友 (郡上市)
青木 涉留 (羽島市)	和田 智咲 (郡上市)
木村 恵美 (各務原市)	三宅 晴 (美濃加茂市)
伊藤 慎介 (山県市)	鈴木 樹 (美濃加茂市)
堀 希実 (羽島郡)	伊佐治綾那 (美濃加茂市)
五十川陽菜 (揖斐郡)	平田 詩織 (加茂郡)
名和 秀晃 (安八郡)	松田 康汰 (中津川市)
橋場 朋栄 (安八郡)	

なぞなぞの答え

①こぶ茶 ②と

大切な気持ち

海津市立城山小学校PTA 伊藤 明美



わが家には、四月から四年生になる息子と一年生になる娘がいます。我が家にも親子で大切にしている約束があります。

約束一 人に優しく、譲る気持ちをもつ。

約束二 ご先祖様・家族・友達に感謝する。

約束一ができたきっかけは、兄弟でのお菓子の取り合いです。自分の思うようにならずに、どちらともが怒り泣きわめくことが続き、約束となりました。

約束二は、他界した祖父が生前「人は生きていくのではなく、生かされているのだ。一人では、誰も生きていけない。周りの助け

があるから、生活できるのだ。」と、話してくれました。その思いを受け継いでほしくて、約束の一つとしました。子どもたちは毎日、朝・晩必ず仏壇に手を合わせて、祖父の言葉を思い出しています。

伊藤家の巻



話そう!語ろう! わが家の約束

わが家は私たち夫婦と高校二年生の娘、中学三年生の息子と愛犬の四人(＋一匹?)家族です。わが家のルールはしっかり決めたわけではないのですが、自然と当たり前になった暗黙の了解があります。

約束一 一人が一つは家の仕事をする。

家の仕事はお母さんがしっかりとこなしてくれていますが、他の家族は昼間、忙しくしているのか、全て任せて当たり前となってしまいました。考えてみると配膳、お風呂掃除、後片付け、掃除と分担してできる仕事は皆でやれば早く終わります。よしやろう!です。

約束二 自分からあいさつする。

あいさつは日常生活の基本で自然にしています。毎日が楽しい日々とは限りませんので時には話をしたくない日があるかもしれません。たった一言の声のかけ合いが気持ちを少し和らげると思っています。

子どもたちがいずれ社会に出た時にはルールを尊び、ちゃんと自立した大人になってくれることを心から願っています。



菅村家の巻



可児市立西可児中学校PTA会長 菅村 秀明
当たり前になった暗黙の了解



保健室

ノート

心と体に向き合う保健室

自分の体との対話

内科的な訴え（頭痛・腹痛など）で来室した生徒は、まず体温を測り、「来室記録カード」に、症状や生活の様子などを記入します。これは、養護教諭が生徒の健康状態を把握するとともに、生徒が自分の生活を振り返って、体調不良の原因を考えられるようになってほしいという願いのもとに行っています。記入後はその内容に沿って生徒と話をし、どうするかを決定します。選択肢は次の三つです。

- ① 授業（活動）を続ける。
- ② 保健室で一時間程度休養する。
- ③ 早退する。

高熱や見るからに重い症状がある場合は、迷わず③となります。また、熱もなく症状が軽そうな場合は①または②を勧めますが、特に②の休養後に、「この後

どうするか？」を決定するまでに時間がかかることがよくあります。

決定にあたっては、養護教諭の一方的な指示ではなく、生徒に「どうしたいか」を聞くようにしていますが、その答えがなかなか出せないことがあります。そのときの症状に加え、それぞれが抱える思いや諸事情？により、葛藤していることがうかがえます。

「もうすぐテストやで、勉強（授業）頑張らないかんのやけど…」「早退すると、成績に響かへん？」「早退すると、親に『あんた、熱もないのに頑張れんかね。』って怒られそうや。」「お母さんに迎えに来てもらわないかんで、迷惑がかかる。」「学級の子にうつしてしまうかもしれないから、帰った方がよいかなあ。」「早退して、今夜塾に行ってもいい？」「明



瑞穂市立穂積北中学校
養護教諭
八木 美江

保健室来室に関して小学校と中学校で大きく違うのは、小学校ではけがの来室者数が内科的訴えの来室者数を上回るのに対し、中学校はそれが逆であることです。この理由として、中学生はけがを予防する術を身に付けたり、軽微なけがの処置を求めなくなったりする一方で、思春期特有のストレスにより体調を崩す生徒が多くなるためではないかと考えられます。

中学校の保健室で、多感な生徒たちと向き合う中で感じていることを綴ります。

日（楽しみなこと）に出かけることになるとるんやけど、今日早退したら、行けなくなる。」「そんなときは、こんな言葉をかけます。「あなたの体は何て言っているかな？」きよとんとした場合は、「体の声を聞いてみて。『もう休ませてくれよ。』って言ってるかな。それとも『大丈夫やで頑張れよ。』かな。でも、いろんな事情や気持ちもあるだろうから、そこは体と心で相談して頭で決定しよう。』すると、「授業は大事やけど、体的には休んだ方がいいと思うで、今日は早退する。」「次の授業を受けてみてから決めよ。』というように、自分で決定をします。『体から『もっと早く寝ろよ。』って言われた。』『体は大丈夫かもしれないけど、気持ち的に今日は無理。』という言葉が発した生徒もいました。

自分の体との対話は、「この後どうするか？」を決める以外にも、生活習慣を振り返ったり、心の状態を認識したりする時間なのだと考えます。

気持ちに折り合いをつける

保健室は時々、何かの出来事が原因で、悲しみや怒りの感情をコントロールできなくなった生徒が落ち着くまでの居場所にもなります。

付き添ってきた先生が退室し、生徒と二人になったときには、こんなふうな声をかけます。「よかったら、話を聴くよ。問題は解決しなくても、少しはすっきりするかもしれない。でも、話したくないなら無理強いはしないから。」「保健室に居られるのは一時間っていきまわりがあるから、それは守ってね。」すると、話し始める生徒もいれば、じっと考え込む生徒もいるのですが、どちらにも共通しているのは、時々時計をみながら「一時間」を意識し、気持ちを切り替える方向へ向かうことです。

時間をかけても問題は解決しないこと、でも、今の状態をなんとかしなければいけないということを、生徒はわかっています。そこで、時間の上限を

与えられることにより、自分の気持ちに折り合いをつけられるのではないかと 생각합니다。

中学生は、一人の大人として自分を確立していく時期です。傷ついたり反抗したりしながら、自分を客観的に見つめたり律したりすることができるようになっていくのだということを、来室者の姿を通して感じています。

保健室は、そんな中学生の「心と体の健康」を支援する場でありたいと思います。



「ちよつと時間あるか。」に感謝

美濃市立美濃小学校 教頭

櫻井文夫

「櫻井君、ちよつと時間あるか。五分でいいから。」と、放課後の職員室で校長先生から声がかかり、同世代の同僚は「にやり」と笑って私を見ました。

三十年近く前、赴任二校目の小学校で出会った校長先生は、私を含めた若手五人ほどを毎日のように代わる代わる校長室へ呼びました。「五分でいいから。」と言われて校長室に入ると、一時間は出てくることのできないため「にやり」と笑うのです。忙しい日に夜六時ころ声がかかって二時間ほど出て来れないと、終わってから自分の仕事になるわけです。「五分でいいから。」と言われると断るわけにもいきません。私たちはこれを「ご指導」と、やや皮肉を込めて呼んでいました。

校長先生からの話は、教育に関することはもちろん、普段の生活や社会の出来事など多方面に至るものでしたが、その中で印象的だった一つが心理学です。「これからの教育では必ず必要になるから勉強しておきなさい。」と言われました。その時は重要性が理解できませんでした。後々「発達障がい」のことであったのではないかと思いました。

校長先生は頻繁に教室を見に来られました。四月の参観日前、教室掲示をする私を見て「参観日だから特別なことをする必要はない。」と。また、掲示してから既に一週間は経つたであろう、児童全員の絵画作品を掲示した廊下の壁を見て「今でも子どもはこの掲示を見るのかな?」「たくさん掲示すれば良いということはない。子どもにとって必要な時に必要なものだけ掲示するように精選を。」と。今では当たり前になっているユニバーサルデザインの教育の考え方や働

き方改革につながるものではないかと思えます。

「ご指導」と皮肉っぽく言いながらも、校長先生の言葉は私たち若い職員には勉強になることばかりで、教員として急成長していることを自覚できるほどでした。

ある日私たち若手は校長先生に内緒で相談をしました。「いつも校長先生に教えてもらってばかりいる。校長先生の教えなしで、何かできないだろうか。」と。

私は毎朝児童玄関で全校児童に「おはようございます。」とあいさつを続けることにしました。ある同僚は当時開催されたバルセロナオリンピックをビデオに撮り、自分の名前を冠した「○〇タイム」と称して、給食時間に独自の解説付きで校内放送を行いました。ほかにもそれぞれ続けられることを決めて実行に移したのです。

一週間ほど経つたでしょうか。校長先生が「君たち何か変わった動きをしていないか。」と。「実は。」とネタばらし。「そんな面白いことをやっていたのか。是非続けてくれ。どんな発見があったか聞かせてくれ。」と校長先生。

私たちはさらに気を良くして、授業や学級経営でも様々な工夫をしました。夜遅くに隣の教室の同僚が授業の準備をしていると、何をやるうとしているのか、どんな面白いことがあるのか興味津々でそっと覗き見します。何をしているのか尋ねると「な・い・しよ」と不敵な笑み。対する自分は「もっと面白くできないかな。」とさらに工夫します。夜遅くなっても楽しい毎日でした。

気が付くと校長室へ呼ばれる回数が減り、校長先生は何も言わず笑顔で教室を見回るようになっていました。

この校長先生と過ごしたのはわずか二年です。もしこの出会いがなかったら、「ちよつと時間あるか。」という校長室での「ご指導」がなかったら、今の私もなかったでしょう。同時にあの時の「ご指導」をもっときちんと実行していれば……と後悔もしています。

子どもたちから 教えられたこと

私には、三人の大切な子どもたちがいます。短大生の長女・中学三年生の長男・小学校三年生の次男の三人です。長女は、しっかり者で兄弟の中では、お母さんのような存在です。春から親元を離れて夢に向かって毎日頑張っています。長男は、我が家の大切なムードメーカーでも頼りになる存在です。次男は、我が家の末っ子で、年が離れていることもあり、家族のアイドルの様な存在です。三人の子どもたちに、毎日楽しませてもらっています。

私も母となり、早くも十九年という月日が経ちました。三人の大切な子どもたちのおかげで、たくさんの思い出や、たくさんの人たちとの出会い、子どもたちの成長など、母親として、そして一人の人間として少しずつ成長させてもらったなあと思います。今も現在進行形です。

自分のことしか考えられなかった独身時代から、結婚して子どもができて、自分のことよりもこの子のためにと思うようになり、私が母親になれるのかという不安な気持ちと、早く我が子に会いたい・元氣ならそれでいいと、待ち遠しかったことを今でも忘れません。

いざ産まれると、我が子は可愛いけれど、不安なことだらけで、検診に行ったり、他の子と出会う機会が増えたりすることで、他の子と自分の子を比べてしまう自分がいました。元氣ならそれでいいと思っ

として、一人の人間として自分もそんなふうに見えるかと反省しました。元氣でわんぱくだった長男が、責任を持ってやり切ろうとしている姿に成長を感じました。

学校の行事や、体育祭、部活動などを通して一つひとつ全力でぶつかっていく長男を、たくさん見せてもらいました。自分の子どもですが、とてもかっこよく、誇らしかったです。子どもの頑張る姿を見ると、私もこんなことではいけないな、頑張ってみようという気持ちも生まれました。

母として、まだまだ未熟な私ですが、子どもを育てているのではなく、子どもたちが母である私を育ててくれているんだと思います。三人の子どもたちがありがとう。これからも自分らしく、自分のペースで成長していく子どもたちを、見守っていききたいと思います。

ていた自分でしたが欲が出てきてしまいました。ちょうどその頃に長女は足が悪いことが分かりベルトを着けることになりました。不安しかなかった私ですが、そんな私とは裏腹に、元氣に泣いたり笑ったり、おもしろいミルクを飲んだり、ベルトを着けていながらも、ハイハイも、つかまり立ちも、歩くことだって、まわりの子たちよりもゆっくりでしたができるようになりました。別に一人ひとり違っていていい、その子のペースで成長できればいいんだと思います。そこから自分の中で四つのことを決めました。

- ①人と比べない
- ②良いところを見つける
- ③笑顔
- ④話は目を見て最後まで聞く

それから、長男が産まれました。その長男も中学三年生となり義務教育を終えようとしています。思春期ということもあり、小学生の頃と比べると一緒に出掛けることも少なくなりました。自分の部屋で過ごすことも多いです。でも、中学に入ってから、学級のこと、学校のこと、部活動など全力で頑張っている姿をよく見かけます。

「やらないといけないから。」と言っていたことがあります。逃げることもできるけれど、「自分がやらない」と思い取り組んでいる姿をみて、私は、母



PN. スーさん (養老郡)



PN. Aoi (大野郡)

question 1

出題・三宅 晴 (美濃加茂市)
〈答えは26ページ〉

ラクダの背中に乗って飲むお茶は、どんなお茶？



「笑顔で支えあい、楽しむ」 読み聞かせ活動

八百津町立和知小学校PTA

本校では母親委員会が年間五回、全学年を対象に朝十分間の読み聞かせを企画・実施しています。今年度PTAスローガン「笑顔で支えあい、楽しむPTA活動」の一つとして自慢の活動です。

「町読み聞かせボランティアサークル」の支援を受けて

以前は町読み聞かせボランティアサークルの方にお願ひし、朝の読み聞かせを実施してきました。その後「和知小校区でボランティアが広がるとよい」という願ひから、

母親委員会を中心に活動するようになりました。しかしながら仕事を待つ母親委員さんが年間何度も参加することは難しく、サークルの方にご協力いただき、継続していました。

広がる「読み聞かせボランティア」の輪

その後、校区の地域の方や保護者の協力を得ようと、読み聞かせに参加していただける方を募集しました。すると「朝、来たついでに読み聞かせをしようかな」と参加

される登下校見守りボランティアの方、「昨年度、母親委員として行った読み聞かせ活動が楽しかったから」と継続して参加される方がみえました。多くの児童の前で読み聞かせをすることは大変さもありますが、やりがいを感じてその後も継続してくださっていることはとてもうれしく感じます。

また「PTA本部役員でも協力しよう」とPTA会長さんをはじめ、多くの本部役員の方に参加していただきました。父親が参加することで、子どもたちは一層新鮮



の顔を思い浮かべながら選んでくださっています。何度か参加していただいている方の中には、季節に合わせた絵本を選んでくださる方もいます。英語の得意な方は英語の絵本をもとに児童とのやりとりを楽しんでみえました。「小学校の担任の先生に読んでいただいた本を持ってきました。」と「教室はまちがうところだ」を読んでくださった方もありました。「私の心に残った一冊」を選ぶ楽しさがあります。

な気持ちで聞いていました。本部役員を終えても続けて参加していただける方もみえ、本当にありがたいと思います。

「読み聞かせのやりがい」

やりがいの一つは本選びです。学校の図書室にある本を選ばれる方、ご家庭にある本を読んでいた

た方もありました。「私の心に残った一冊」を選ぶ楽しさがあります。

また「とても楽しかった。」「心にジーンときた。」等、素直に反応する子どもたちの姿を見るのもやりがいのひとつです。低学年の素直な反応は読み手に元気を与えてくれます。高学年ではしつとりとした時間を共有することができます。子どもたちは読み聞かせの時間を心待ちにしています。

「話そう！語ろう！わが家の約束」運動

家族で「ノーマディア(N)」のめあてを決め、その時間帯に「読書(D)」「家庭学習(K)」を行う「NDKトライアル週間」という活動を昨年度から行っています。読書では「読み聞かせ」「交代読書」「回覧読書」「めいめい読み」等に家族で取り組んでいます。

児童の感想から「久しぶりにお母さんに読み聞かせをしてもらえてうれしかった。」等、学年が上がっても読み聞かせは子どもにとっても楽しいことがわかります。保護者からは「交代読書が楽しかった。家族の会話が増えた。」等、笑顔で楽しむ姿が増えています。これからも読み聞かせを通して、楽しい時間をつくっていききたいと思います。





窓ぎわのトットちゃん

黒柳徹子 著
講談社

各務原市立鷺沼第二小学校

PTA副会長 富田ひろみ



「電車の教室、楽しそう。行ってみよう。」そう思いながら初めてこの本を読んだのは、私が小学生の頃です。「楽しそう」と感じたその学校は、トットちゃんこと

黒柳徹子さんが小学生時代を過ごした「トモエ学園」。トットちゃんにとっては二つ目の小学校です。それは、前の小学校を退学になってしまったからです。何と一年生で!!

授業中に机の蓋を何度も開け閉めしたり、窓際に立ってチンドン屋さん呼び込んだり…そんなトットちゃんを丸ごと受け止めてくれたこの学園で、トットちゃんが伸び伸び過ごし成長していく様子が、この本には書かれています。どのエピソードにも、子どもらしい行動や心の動きが書かれていて、まるで自分がトットちゃんになったような気分になります。

その一方で、トットちゃんのお母さんや、この学園の小林校長先生の、言葉や子どもへの接し方に心を動かし読み進めている自分もいました。

この本の中で、私の心に一番残っているのは、深い愛情を持って子どもに接する小林宗作先生の姿です。好奇心旺盛なトットちゃんのエピソードの中には、危ない!汚れる!やめなさい!と、つい言ってしまうような、驚くような行動もたくさんあります。でも、

小林先生は必要以上に声をかけず、手伝わず見守られています。子どもが自分で考えて行動している事に対しては、失敗も経験だと、子ども自身の気づきを大切にされているのだと感じました。

また、小林先生はトットちゃんに言い続けられました。「君は、本当は、いい子なんだよ!」と。黒柳さんは本の中で、次のように述べています。「『いい子じゃないと、君は、人に思われているところが、いろいろあるけれど、君の本当の性格は悪くなくて、いいところがあつて校長先生には、それがよく分かってるんだよ』と伝えたかったに違いない。その時は本当の意味は分からなくてもトットちゃんの心の中に自信をつけ、心の支えになったのです。もしトモエに入ることがなく小林先生にも逢わなかったら、私は何をしても悪い子で、コンプレックスにとらわれ、どうしていいかわからないままの大人になっていたとおもいます。」小林先生のように、子どもの姿を丸ごと受け止めることが、その子の持つ持っているよさを伸ばすためにどれほど大切であるのかと改めて感じました。

この本は三十年以上前に出版された児童書です。子どもを取り巻く環境は、日々大きく変化しています。でも子どもと接していく中で大切なキーワードがこの本にはたくさんあるように思います。そして、自分も子どもだったことを思い出させてくれる一冊です。

「勉強するのは何のため?」

苦野一徳 著
日本評論社

関市立板取川中学校

PTA会長 鷲見恵史



もし、子どもから「何で勉強しないといけないの?」という疑問文を投げかけられた際に、子どもの納得いく言葉を投げかけてあげられる親って何人いるだろうか? 「そりゃ、エエ高校・大学入って、エエ会社に入ると将来安泰だから

ね」という発言を言いそうなどころだけれど、数年前に発売されて大抵の中学校の図書館に入っている村上龍・著の「13歳のハローワーク」によってその言葉は否定されているから子どもたちもわかってはいるし、実際それは間違っでは無いと思うけど、それが全てではないのは大人も当然わかっている。

そうであれば自分なりに噛み砕いて言葉にする事にトライしてみよう!と諸事情あつて三年前から中学校のPTA会長になる事が決まっていた私は、何故だかその「三年後の入学式の祝辞のスピーチ」のテーマを真っ先に決めたのであった。

とはいえ、何故人は勉強をしな

いとイケないのか?の答えが掲載されている本がなかなか見つからない。グーグル先生やヤフー先生もなかなか良い言葉をつむいでくれないので、本屋のハウツー本コーナーあたりから適当にチョイスして本を読んでみていったら行き着いたのは哲学書のコーナーだった。

哲学なんて全くもって興味もつてなかつたけれど、例えば池田昌子著「14歳の君へ」なんかはすごく言葉が噛み砕いて書いてあるのとどつきやすかつた。ただ、哲学関連の本は、さっきまで肯定してた事を、平気でいきなり同じ内容で否定してきたりと、考え方の幅が大きすぎて普通の本を読むよりもドツと頭が疲れるので読む

ペースがなかなか掴めない自分があった。一部の本は「なら、結論としての考え方はどつちやねん!」と怒れるのもあつた事は補足しておく。

そんな中で一番読み易かつたのが、今紹介する「勉強するのは何のため?」という本だった。詳しくは是非読んでもらえたらと思うので、この本の中の結論等は書かないでおくけれど、子どもが納得出来る答え↓納得解(この本ではこう定義している)をこの本であれば中学生なら大体理解出来るような気がしている。正直、文章をハシヨって書ける程の文才を持ちあわせていないので、大変申し訳ないけれど、気になる方がいたら、くだ

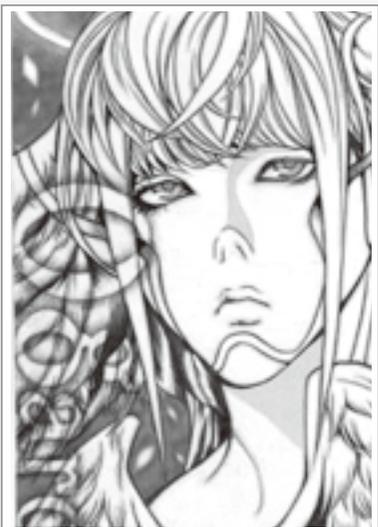
いようだけと読んでみてほしい。そんなこんなで、三年間でこういう関連本を何冊か読んで噛み砕いた文章を作つて、三年経過する入学式の一ヶ月前に、前PTA会長や教頭先生にスピーチ内容を聞いてもらったところ、内容は概ね好評だったので、そこで満足してしまつて結局はスピーチを暗記するという行為を疎かにしてしまつた為に、入学式のスピーチはマイクを前にして言葉がすつとんでしまった事は言うまでもなかつた。そうか、私が読むべき本はスティーブジョブズのプレゼンの本だったのかもしれない。

Illustration&Quiz

イラスト&クイズ



PN. スーさん (養老郡)



PN. Tomosaburo (養老郡)

question

出題・金森 愛苗 (岐阜市)
(答えは26ページ)

弟に2つあつて妹には1つしかないものって、な~に?

子の思い

がんばったつどい集会

各務原市立那加第三小学校

三年 額瀬 華音

わたしたち三年生は、この前の「つどい集会」で三年生のがんばつていることを全校のみんなに発表しました。せいかつやリコーダーのことを話しました。わたしはつどいリコーダーなので、みんなが本番でせいこうできるようにめあてを考え、よびかけました。

三年生みんなに、一言ずつせりふがありました。わたしは、大きな声を出すために、声の玉を遠くまでとばすことと、ゆっくりとはきはき言うことに気を付けて話しました。リコーダーはきれいな音が出るように、いきの強さに気をつけてふきました。

学校から帰ると、発表を聞きに来てくれたお母さんが、「がんばったね。じょうずだったよ。」と、えが

おでほめてくれました。三年生のたから物をみんなに伝えることができたのでうれしかったです。

家族のありがたみ

恵那市立山岡小学校

四年 額瀬 尚果

私は家族がどれだけ大切な存在で、普段どれだけ支えてもらっているか頭では分かっているつもりでした。でも、ついつい反抗的になったり、感謝の言葉をなかなか素直に言えなかったりしていました。

去年の十月、腕にけがをせずと固定してなければならなくなりました。体を思うように動かせず、家族の助けがないとできないことが増えました。私は家族に「悪いなあ。」と怒っていました。そんな時、お母さんが私の頭を洗ってくれながら言いました。「尚ちゃん三人目だから、お姉ちゃんたちみたいには、ゆっくりみて

あげられなかったけど、今、尚ちゃんがあまえてくれてうれしいよ。これは神様からのプレゼントだね。」と。

私は家族に迷惑をかけるから、もつとがんばらなきゃいけないと思っていたけど、お母さんはそんな私の気持ちにも気付いてくれていました。お母さんの言葉で改めて、私は家族のありがたみに気付きました。

腕が治った今、私は少しでも家族を支えられるようになりたいと思っています。

負けず嫌いな私

本巣市立本巣中学校

二年 松葉 みなみ

私は小さい頃から何をやるにも負けるのが嫌でした。よく家族とやったトランプで負けるだけで、小さい頃はすぐすねてしまっていました。小学校低学年の頃、体育の授業や運動会の競技で上手いはず

負けてしまうと、相手のチームに文句を言ってしまう自分がありました。ある日、私のチームが勝った時に相手のチームから文句が聞こえてきました。その時私は、よい気持ちではありませんでした。負けず嫌いという性格は、勉強、スポーツ、日々の生活の中で私を成長させてくれます。しかし、時には、人を傷つけてしまうこともあるのです。私はこのとき、上手いかななくて相手を責めるのではなく、自分はどうなのかを考え、改善することが大切だと学びました。

私はバレー部に所属しています。部活で上手いかななくて仲間にも強くなってしまつこともありました。負けず嫌いな性格によって不快な思いをさせてしまったこともあったと思います。だから、部長になってからは、上手いかなかった原因を考え、改善できることはすぐ行動に移すように心がけました。現在は上手いかななくて、すぐに切りかえて前を見て進むことができていると思います。

これからの生活の中でいくつかの壁にぶつかった時、負けず嫌いな性格が私の成長につながるように、相手の立場に立って行動したいです。そして、生活が充実したものとなるように一日一日を大切に過ごしたいと思います。

親の願い

親の願い

高山市立花里小学校PTA

会計 敷下 圭一

普段、私は仕事で夜遅くまで会社にいる為、平日は家にいない時

間が多く、もつぱら育児・家事を妻に委ねる事が多いです。そのため、普段子どもと接する時間が少なく、父親らしい事があまり出来ていないと感じます。「申し訳ないなあ」と思いつつも、つい妻に育児を任せきりにしてしまふ。私の様な父親さんは、世間に少なくとも無いのではないのでしょうか。そんな子どもと接する時間が少ない中で、子どもとの時間を楽しむどころか、つい子どもの目に付く行動が気になり「叱って」しまいます。息子は小学校二年生になりましたが、色々な事が出来る様になった一方、「楽しい」事や「楽しい」事を優先する様にもなつてき

ました。「躰」と思ひ注意をしますが、言い訳や口答えもする様になつてきました。すると、ついつい「注意」がヒートアップし「叱る」になつてしまふ。子どもにしたら、たまつたものではないでしょう。普段から一緒の時間が少ないのに、顔を合わせたらガミガミ「叱る」ばかりの親なのです。子どもでもの事を思つて「叱つた」つもりでも、子どもにとっては「叱られる」ばかりで、もう話を聞きたくない！と思うのか、私の言う事をあまり聞かないと感じる事があり、一時期、私の子どもに対する思いが空回りしている、と悩んだ時期がありました。

二〇一八年夏に、地域の行事で『地引網体験』があり、子どもと二人で参加をして来ました。子どもの参加者は小学校一年生から六年生までで、親子参加の行事でした。色々な年齢の子どもたちが参加しましたが、子どもたちはイベント事に心が躍り、つい調子に乗ってしまった面もあったのでしよう。自分の子だけではなく皆も出来ない事は出来ないし、目につく行動もありました。

それに対して私は、周りに迷惑が掛からない様にと最初は何時もの調子で自分の子を「叱って」いたと思います。しかし、周りの親御さんの中には「叱る」よりは

勘違い



逆さ言葉

まるくなるなくるま

(丸くなるな車)

出題・伊藤 慎介 (山県市)

信頼関係なのではないかと思うのです。

子どもに対する「こうあって欲しい」という親の「願い」を、感情のままストレートに子どもにぶつけて「叱って」しまふのは、子どもの「耳に伝わる」のは早いけど、子どもは「心に伝わる」のは結果的には遅くなってしまふのかもしれない。多少遠回りでも、子どもとの時間を増やす、一緒に行動する機会を多く持つ中で、子どもとの信頼関係を築く事を第一に考えれば、口に出さずともいわず親の「願い」が子どもの心に染みて伝わってくるものと信じます。

とはいえ、相変わらず声を荒げてしまふ事も多いです。親だって完璧じゃない、子どもと一緒に日々修行の毎日だと、ここは割り切るしかないですね…。

子どもの成長

中津川市立阿木中学校PTA
副会長 原多香子

親として子どもの成長は気になる場所です。人それぞれだと思いますが、私が成長を感じたことの一つにスポーツがあります。我が家には子どもが三人います。中学三年生、小学六年生、小学一年生です。主人の影響もあり、三人ともバスケットをやっています。

長男は四年生から始めました。阿木地域は子どもの人数が少なく、保育園から中学までずっと同じメンバです。(これはこれで仲良しで良いところです)そんな子どもに外の空気を吸って欲しいという主人の願いから、よその地域で全く知らない子の中に突然入ってしまった。初めは輪に入れないで喋りかけることもできずに苦労していました。バスを出したり、もらったりする間に打ち解けて友達ができるようになりました。中学生になっても部活以外でクラブチームに所属させましたが、すぐに仲間ができて「コミュニケーション能力が高くなつたなあ」と成長を感じました。

外でクラブチームに所属させましたが、すぐに仲間ができて「コミュニケーション能力が高くなつたなあ」と成長を感じました。そして何より、クラブで鍛えてもらったのは人としての成長です。挨拶をする、仲間を助ける、基本的な事ですがなかなかできないものです。そういう気づきが自然に身につけてきました。また、バスケのプレーはもちろん、精神面でもかなり鍛えてもらいました。叱られて涙したことは数知れず。でも、どんな逆境にも耐えうる力をつけてもらったと思っています。人として成長させてもらい、素敵な仲間にも出会い、かわいがってもらった中学三年間は掛け替えのないものになったはずです。親が見ているつもりです。

「上の子に習え」ではありませんが、長女も外のチームに出しました。この子もまた、輪に入れない、苦労をしました。知り合いもない、バスケも下手くそ、毎回練習は沈んだ顔で参加していました。

らかな対応で子どもに接されている方がいました。」そうだよな、折角の親子行事だし、ガミガミ叱る事もないな」と、いつしか私も子どもと行事そのものを楽しんでいました。むしろ、父親としてカッコいい姿を見せようと張り切っていたかもしれない。普段やらない地引網体験や大人数でのバーベキューなど、父と子の思い出としてとても印象深い体験が出来たと思います。

私は、今後も仕事に大部分の時間を取られ、子どもとの時間は相変わらず少なくなってしまうのは仕方のない事、と理解しています。これまではそんな少ない時間の中で、子どもの事を思えばと五月蠅い事も口酸っぱく言ってきましたし、「叱る」場面も多かったです。最近では少ない時間の中で沢山「父と子との時間」を持つ事を考える様になっています。一緒に行動する中で、子どもがちゃんと自分の方を見てるか？話を聴いているか？「叱る」前に大事な事は、子どもとの

教育の窓

「どう生きるか」

岐阜市立長良西小学校
教頭 小野島孝

世相を表すものとして、ベストセラーや流行語というものがあります。日本出版販売株式会社による「二〇一八年間ベストセラー」総合の部で一位を獲得したのが、「漫画 君たちはどう生きるか」でした。昭和十二年に吉野源三郎氏が少年少女向けに書いたものを漫画化したものです。「もの見方」「貧困」「いじめ」「勇気」など昔も

今も変わらない人生のテーマに、人間としてあるべき姿を求め続ける中学生の主人公「コペル君」と叔父さんの物語です。もうひとつ「現代用語の基礎知識」選二〇一八ユーキャン新語・流行語大賞トップ10では、「ポーっと生きてんじゃねーよ！」が選ばれていました。NHKのバラエティ番組「チコちゃんに叱られる！」の中でおかっぱ頭の五歳の少女「チコちゃん」というキャラクターが使った言葉です。チコちゃんの出す素朴な疑問に出演者が上手く答えられないと、「チコちゃん」に叱られるというものです。どちらも「生き方」がテーマとなっています。

子ども達が生きる今後の世の中を考えると、技術革新はさらに進化していくと思われまふ。この五十年間を見ても、通信機器が黒電話からポケットベル、携帯電話、スマートフォンへと変わってきました。技術革新のスピードはさらに加速していくのではないかと考えています。それによる安心・安全で快適な暮らしが提供される一方で、「今ある職業の半分近くがAIに代替される」、「今ある社会全体のシステムが大きく変わる」と将来社会を予想している人もいます。

ひなあられ



逆さ言葉

いかたべたかい

(イカ食べたかい)

出題・五十川 陽菜 (揖斐郡)



しいたけかつ丼

岐阜県学校栄養士会

しいたけは、岐阜県の各地で栽培されており、地場産物のひとつです。また、食物繊維を多く含み、大腸の働きを整える効果があるので、積極的に食べてほしい食材です。

「しいたけかつ丼」は、しいたけの苦手な子どもにも、しいたけをおいしく食べてほしいという願いから、地域の直売所で提供されているメニューを学校給食に取り入れたものです。しいたけに衣をつけて「かつ」にすることで、おいしく食べることができます。子ども達には、「しいたけは苦手だけど、これなら食べられるよ。」と好評で、「子どもが給食で食べておいしいと言うので、食べに来ました。」と直売所に食べに行く親子もあるほど、家庭でも話題になった料理です。「しいたけかつ」のカリッとした食感を残すために、卵とじの具をかけたあとに最後にのせていただきます。

作り方

- ごはんは、やや硬めに炊く。
- 鶏肉は1.5cm角くらい、たまねぎはくし形切り、にんじんはせん切りにする。
- かまぼこはいちょう切りにする。
- みつばは3cmに切る。
- しいたけは軸を取り、軸の部分はせん切りにする。
- 鍋にサラダ油を熱し、鶏肉を炒める。たまねぎ、にんじん、しいたけの軸を入れてさらに炒め、ひたひたの水を加えて煮る。
- 具材が煮えたら、かまぼこ、調味料を加える。
- 卵を溶きほぐし、⑦にまわしかけ、みつばを入れて仕上げ。
- しいたけは塩・こしょうをふる。小麦粉、小麦粉+水、パン粉の順に衣を丁寧につけて油で揚げる。
- どんぶりにごはんを入れ、⑧をかけて「しいたけかつ」をのせる。

材料

(材料4人分)

米	2合
鶏もも肉	40g
たまねぎ	1/2個
にんじん	1/4本
かまぼこ	20g
鶏卵	3個
サラダ油	大さじ1/2
砂糖	大さじ4/5
塩	大さじ1/3
しょうゆ	大さじ4/5
みつば	15g
しいたけ	中サイズ4枚
塩	少々
こしょう	少々
小麦粉	20g
パン粉	30g
天ぷら油	適量

●栄養価(1人あたり)

エネルギー	430kcal
たんぱく質	13.7g
脂質	7.6g
カルシウム	37mg
鉄	1.7mg
レチノール当量	111μg
ビタミンB1	0.39mg
ビタミンB2	0.24mg
ビタミンC	4mg
食物繊維	2.3g
食塩相当量	1.5g



子の思い 親の願い 教育の窓

ることが大切ではないかと思っ
ています。

『クロカン』

下呂市立金山中学校
教頭 大前正水

このような社会が目の前に広がり、世の中が大きく変わるうとしている今、私たち大人が子どもたちにできることは何かを考えると、それは、「自分で考え、自分で判断し、自ら行動できるようにする」まさに、ベストセラーのタイトルにもある「君たちはどう生きるか」を子どもたちに問い続けることではないかと思えます。

この本先に苦しい「クロカン」を生徒たちは誠実に取り組む。誰一人としてふざけたり、いい加減に走ったりする生徒はいない。(そこが、本校の生徒のよさだといつも感じている) 持久走が得意でな

ある。
また、ある生徒は「クロカン」の振り返りでこんなことを書いていた。「僕は持久走が得意ではありません。いつも最後を走っていました。もう二度と『クロカン』はやりたくありません。でも、僕は一つだけ自信できることがあります。それは、一度も休まず、一

い生徒でも、最後まで自分のペースで走り切る。応援する生徒も「がんばれ！あと少しやよ！」と必死に仲間に声援を送る。時には応援だけでなく、一緒に走りながら仲間

ある時、こんな生徒がいた。「クロカン」の途中で足を引きずりながら走っている生徒をみつめ、私は「そんなに無理しないでリタイヤしたら？部活の新人戦もあるから…」と言つと、その生徒は「いや、完走します。私は『クロカン』に負けたくありません」と言つて走り続けたのである。完走した後この生徒の顔は自己新記録を出した時よりも充実感でいっぱい表情を見せていた。

また、ある生徒は「クロカン」の振り返りでこんなことを書いていた。「僕は持久走が得意ではありません。いつも最後を走っていました。もう二度と『クロカン』はやりたくありません。でも、僕は一つだけ自信できることがあります。それは、一度も休まず、一

度も歩かないで完走したことです。苦しかったけど満足感でいっぱいです」
今年もクロスカントリーの授業があり、様々なドラマがあった。生徒たちのひたむきに頑張る姿。「先生、自己新やった！」と汗を拭きながら笑顔で喜んでいる姿。そんなすばらしい姿を毎時間見ることができ、私は体育教師冥利につきると感じている。

最近の子どもたちは「打たれ弱い」「我慢ができない」など言われることが多い。それは、子どもたちの前から壁を大人が取り除いてきたからではないか。子どもたちには目の前の壁を必死になって乗り越える経験が必要なのである。私はこのクロスカントリーの授業を通して、「苦しいことから逃げない強い心」を育てたい。そして、苦しい中、弱い自分に打ち克ち、最後まで走り切った時の達成感を生徒たちに味わわせてやりたいと願っている。それが、本校の「クロカン」なのである。

本校の校区は、清流長良川の中流右岸に位置しています。毎年五月から十月に行われる長良川鵜飼は、千三百年の歴史があるとされ、校区に住まわれる鵜匠さんにより、鵜を操った伝統的な漁法は脈々と伝えられています。また、長良川対岸の金華山の景観もさることながら、岐阜市最高峰の百々ヶ峰を仰ぎ、山と川に囲まれた美しい自然が残る地域です。

生徒数の増加にともなう長良中学校と分離し、開校三十一年目を迎えた本校の校歌は、「東の峰の霧はれて」で始まり「二番では、「長良の清き川」が歌われます。

清流長良川の恵みと治水によって歩んだ街の歴史もあり、二年生の総合的な学習の時間は、防災学習を中心に行っています。今年度より、岐阜市水防連合演習を、土曜授業の一環として位置づけ、水防技術や水防体制を「知る」ことや、地域の方と「活動すること」を目標に実施しています。生徒は、暑い中でしたが、土のう袋をいくつも作り、杭を打ち、さらに土のうを積み上げていく作業を、学級ごとに演習しました。土のうの重さ、杭が地面に入っていく感触や力加減を体験から学びました。今年、岐阜市にも大きな台風が何度も通過し、七月の豪雨の際には、長良橋周辺の陸閘が閉じられました。陸閘の重要性を事前に学習していたことにより、閉じられたことが、どの程度の危険水域であるかを考えて自宅待機していた生徒が多くいました。

現在、各種の災害情報の速報を目的に、全国瞬時警報システム（Jアラート）の整備が国で進められています。校区内にも、放送機器が整備されています。しかし、科学技術の進歩によって、各種の機器が整備されたとしても、人が知り、活動するには、人の力が必要です。このため、九月には、校区の二会場で行われている敬老会での一部の時間をいただき、

生徒が学習の成果として、全国瞬時警報システム（Jアラート）の屋外拡声子局位置を紹介しました。作成した地図を配付し、地域に住むお年寄りに、共に避難することについて語りました。

十一月には、段ボールを使って、体育館での避難所の設営演習も行いました。避難所を設営することを通して、地域を守る一員としての自覚や、自分たちにできることを考える学習でしたが、簡単だと思っていたことがなかなか進まないことや、大勢の中での一斉の作業では、指示が通らないことなど、避難所での生活を行う上で、必要なことを身をもって学ぶことができました。

地域の歴史と文化を大切にしつつ、今の暮らしの中で、中学生の自分たちができることを、これから、地域の方と一緒に考え、活動したいと考えています。



▲避難所開設について班で相談



▲Jアラートを使った話し合い



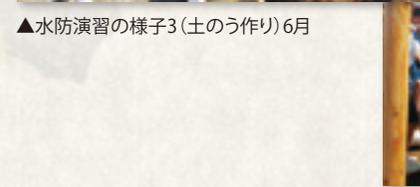
▲避難所開設における注意の講義

東長良中学校校区防災行政無線子局設置場所
～Jアラート作動時の対応マップ～

③パチンコキヤ 長良店	①長良小学校	⑭長良高校	⑮長良東公民館	⑰真福寺中公園	⑱岐山町公民館	⑥長良公園スポーツ研修センター	⑤真福寺加圧ポンプ室	⑧恵光学園	②尾花園
④長良広場	②長良八幡町遊園地	⑱新屋敷公民館	⑩雄総陸閘	⑪長良雄総台排水池	⑲雄総柳町1丁目	⑦雄日ヶ丘公園	⑬岐阜バス回転場	⑫志段見公民館	⑨古津公民館



▼水防演習の様子2(くい打ち)6月



▲水防演習の様子3(土のう作り)6月



▲水防演習にむけて学校の砂場での練習 5月



◀避難所設営演習(段ボール)11月



▲水防演習の様子1(土のうを運ぶ)6月

ふるさとを織る「地域と私(防災教育)」



関市立武儀東小学校は、全校児童六十八名の学校です。本校は、関市北東部を水源とする津保川上流域に位置し、清流と四季折々の豊かな自然に恵まれています。学校の教育目標「あたたかい心でたくましく生きる子」の具現のため、「目標に向かってがんばる」「よく考えて行動する」の二つを子どもたちは合言葉にし、様々な活動に取り組んでいます。その活動の一部を紹介します。



やまゆりレクリエーションの振り返りでは、ルールを守って楽しく遊ぶことができたという感想が多く出ました。



ルールが分かりやすく伝えられるように工夫しました。

笑顔いっぱい! やまゆりグループ活動

本校では、やまゆりグループ(異学年集団)による児童主体の活動を年間を通して行っています。昼休みは、定期的に「やまゆりグループ」で遊んでいます。また、春には「やまゆりハイキング」、秋には「やまゆりレクリエーション」を仕組んでいます。

春のやまゆりハイキングは、里山の風景が残る自然豊かな校区を巡り、ふるさと武儀のよさを再発見することをめあてとしてハイキングを楽しみました。

秋のやまゆりレクリエーションでは、六つのグループごとに、手作りの遊びを考えました。遊びは「まとあて」「キックターゲット」「ひっくり返し競争」「フィッシングゲーム」「輪投げ」「ポウリング」です。何もないとこからグループで知恵を出し合い、形にしていって過程を大切にしています。他のグループの児童が楽しんで遊ぶことができるように話し合いを持ち、改善を重ねている姿が随所に見られました。

当日は、それぞれの遊びのブースで、「がんばって!」「おいしい!」など温かい言葉が飛び交い笑顔いっぱいレクリエーションとなりました。

この活動を、中心になって引っ張ってくれたのは六年生です。「苦労したけれど、みんなが楽しんでくれたからよかった。」という言葉に重責を感じながらも、最高の会にしようという気持ちが表れていました。この会を通して、六年生がすべきな姿を見せ、その姿から下学年は多くのことを学びました。そのつながりが武儀東小の良き伝統となり受け継がれていくことでしょう。

やまゆりハイキングのときは、やらなければいけないことが残っていても、そのことに気づかなかつたからスムーズに活動を進めることができませんでした。しかし、今回のやまゆりレクでは、やらなければいけないことを頭の中で整理して行ったこと、やついでないことを考えながら行うことができるようになりました。私が工夫したことは、紙やノートにやらなければいけないことを書き出して、やったものには○、やっていないものには×をつけることでした。こうすることでやらなければいけないことが分かりやすくなりました。このように私が成長できたのは、やまゆりハイキングでの失敗の経験や仲間の声かけなどがあったからだと思います。
(六年生の感想)

秋のやまゆりレクリエーション



秋の「やまゆりレクリエーション」みんなで力を合わせて準備をしました。

春のやまゆりハイキング

みんなでお弁当を食べることもやまゆりハイキングの楽しみの一つです。



武儀地域の豊かな自然を生かした「花見つけピンゴ」を楽しみました。



春の「やまゆりハイキング」グループで協力してチェックポイントの問題をクリアしていきます。



実際に遊びを試しながら、誰もが楽しく遊ぶことができるためのルール作りをしました。



それぞれの遊びのブースで、「がんばって!」「おいしい!」など温かい言葉が飛び交っていました。



柔道部



「全員が県大会に出場できるように」

私たち柔道部は、1年生2人、2年生4人、計6人で活動しています。私たちは、県大会出場を目標として、日々の練習に臨んでいます。また、礼儀を大切にしている、毎日、「会えば挨拶」を当たり前にするを意識しています。これからも、みんなで高め合って頑張っていきます。

剣道部



「感謝と思いやりを忘れないチーム作り」

僕たち剣道部は、男子7名、女子3名で活動しています。僕たちは、どんなにつらい練習でも、自分に負けないという強い心を常にもって、日々、稽古に励んでいます。これからも、感謝と思いやりの心をもてるチームをみんなで作っていきましょう。

水泳部



「最高のレースを」

私たち水泳部は、2年生13人、1年生13人で活動しています。水泳は水中でないとできないスポーツです。そのような環境があることに感謝し、自己ベストの更新を目指して練習を重ねています。これからも、大会で最高のレースができるよう頑張っていきます。

陸上部



「昨日よりも速く、遠く、高く！」

僕たち陸上部は、常に「昨日の自分のベストを超える」という思いをもっています。日々、互いに助言や忠告を合して練習に取り組んでいます。僕たちが練習できるのは、保護者、顧問の先生やコーチの支えがあってこそです。今後も感謝の気持ちを忘れずに練習をしていきます。

サッカー部



「サッカーはチーム」

僕たちサッカー部は、2年生11人、1年生8人で活動しています。僕たちはチームであることを考え、仲間たちと助け合いをし、チーム全員で練習することを心がけています。今後はチーム全体の技術向上をめざして、声をかけあって、日々の練習を頑張っていきたいと思います。

軟式野球部



「気づく力を磨いて目標達成へ」

僕たち軟式野球部は、2年生9人、1年生10人で活動しています。野球と学校生活を通して「気づく力」を身に付け、チーム、学校、地域に貢献することで、みんなから応援されるチームを目指します。支えてくださる多くの方に感謝し、中体連で目標達成ができるように、全員野球で頑張ります。

手芸部



「少しでも上達できるように」

私たちは、1年生7人、2年生9人で活動しています。私たちは短い活動時間を有効に活用して、丁寧に細かな作品づくりに取り組んでいます。また、作品の鑑賞会を行って、自分の良さ、次への目標を見つけられるようにしています。少しでも上達できるよう頑張ります。

美術部



「高め合い」

私たち美術部は、主に個人で絵を描き、自由に作品を作っています。定期的に行っている交流会では、学年関係なく作品を交流し、互いに高め合っています。また、好きなものを描くだけでなく、コンクールにも出品しています。これからも、個性を大切に、一生懸命作品を作っていきます。

音楽部



「『音』を楽しみ、精華らしくNコン金賞」

私たち音楽部は、来年のNHKコンクール岐阜本選で金賞を取るという大きな目標をもって、毎日の練習に励んでいます。そのために、仲間との信頼関係を強くして、私たちらしい合唱ができるように努力しています。聴いてくださる方全員に感動を与えられるように頑張ります。

卓球部



「共に強くなる」

僕たち卓球部は、団体で東海大会出場を目標に日々練習に取り組んでいます。卓球台を広く使える日は、男女関係なく練習したり、1・2年生合同での試合形式の練習をしたりなど、全体が強くなることを大切にしています。これからも、仲間同士で強くなれるようにがんばりたいです。

女子バレーボール部



「全員が貢献するチーム」

女子バレーボール部は、2年生9人、1年生7人で活動しています。私たちは、声を出すことを大切にして、日々の練習に励んでいます。一つひとつ全力で取り組み、全員がチームに貢献し、一つでも多く勝てるよう頑張っていきます。

男子バレーボール部



「目標に向けて」

僕たち男子バレーボール部は、2年生4人、1年生3人で活動しています。僕たちは、県大会出場を最終目標にしています。目標を達成するために、技術の向上やボールをつなぐことで楽しいと思えるバレーボールを目指しています。一人ひとりがチームに貢献できるよう努力していきます。

演劇部



「夏の大会で金賞を目指して」

私たちは、今年こそ夏の大会で金賞を取り戻すことを目標に活動しています。演劇は誰かに観ていただくものです。だから、大きな声、豊かな表情などを意識して、観客に満足していただける舞台を大切にしています。本番は何が起こるか分からないからこそ、日々の練習を精一杯頑張っています。

科学部



「検定取得とタイピングの向上」

僕たち科学部は、パソコンの技能を向上させるため、日々練習をしています。その中で、年2回あるICTプロフィシエンシー検定の級の取得をめざし、タイピング練習やコンピュータの基礎知識、ワードやエクセルの使い方を学んでいます。これからも、全員で楽しく活動していきたいです。

茶道部



「和敬清寂」

私たち茶道部は、2年生8人、1年生5人で活動しています。日頃から「和」の基本である礼儀を大切にしています。毎年学校の先生を招いて行うお茶会に向けて、学年の枠を超えた練習を入れながら、より表千家の人間としてふさわしい作法の練習に励んでいます。

ソフトボール部



「目標に向けて」

私たちソフトボール部は、2年生4人、1年生5人の計9人で活動しています。東海大会出場を目標として、日々の練習を重ねています。時には、弱い部分が見え、練習を疎かにしてしまうこともあります。目標達成に向けて、より一層頑張っていきたいです。

女子バスケットボール部



「市大会優勝、そして県大会へ」

私たちの目標は、市大会優勝と県大会出場です。顧問の先生には、常に厳しく指導していただき、毎日緊張感をもって練習をしています。そんな張りつめた空気を社会人コーチが癒してくれます。涙あり、笑いありの私たちですが、今後も応援よろしくお願ひします。

男子バスケットボール部



「意識しながら練習」

僕たちは、2年生12人、1年生8人で活動しています。普段の練習を何となくやるのではなく、体の動かし方や声を出すことなど、いろいろなことを意識しながら練習をしています。実力はまだまだですが、強いチームになれるよう、これからも一生懸命頑張っていきます。

私たちのPTA



水門川の中の清掃もがんばりました



水門川おそうじ隊
早朝より集まっていたきました



舗道の樹木の下もきれいにしました



ベルマーク集計作業



テトラパックの整理

執行部 拡大実行委員会での様子



広報誌「興文小会報」



【家庭教育】給食試食会
みんなでおいしくいただきました



【家庭教育】給食試食会
試食の前に講師から熱心に話を聞きました



学校紹介

興文小学校は、天保十一年に大垣藩学問所が作られたことに始まり、幾多の変遷を経ながらも今年創立二七八年を迎える大変長い歴史をもつ小学校です。

学校の教育目標「伝統のほこりをもつ強く正しい興文の子」よく考える子 仲よくする子 たくましい子 よく働く子 ほこりをもつ子」のもと、伝統の興文教育の精神である「致道(ちどう)」「興文偃武(こうぶんえんぶ)」「致知格物(ちちかくぶつ)」が受け継がれてきました。

致道(ちどう)とは「学問や人間の道を研修して極めよ」という意味。興文偃武(こうぶんえんぶ)は「武器はしまって使わないようにし、学問をしっかりとやれ」ということで、「けんかやいじめはやめて勉強にうちこみなさい」という意味。致知格物(ちちかくぶつ)は「何事にも、どうしてそうなるのかと疑問をもって追究すれば、知識は自分の身につけてくゑ」という意味です。

PTA紹介

今期のPTAスローガンは、「明るく！楽しく！元気よく！」と広げよう笑顔の輪」です。

ありふれた当たり前の標語に感じますが、当たり前で簡単な事程難しいと思います。「継続は力なり」といいますが、明るい環境と楽しいと感じる心がなければ継続させることも力になることもありません。不撓不屈の精神で、仲間たちと共に夢や希望を持ち、自己満足だけでは終わらない笑顔の輪が子どもたちに広がってほしいとの願いで活動しています。

PTA活動のしくみ

総務委員会
総会開催、サークル設立、「わが子のあゆみ」回覧等を通し、PTAが円滑にかつ充実したものになるよう活動しています。

家庭教育学級

「親子でハッピー♡幸せ家族」をテーマにほめる達人講座や給食試食会、親子クッキング、スクラップブックなど様々な学習会を企画しております。楽しく学びながら、コミュニケーションの場として活用していただけるように活動しています。

保健厚生委員会

夏休みのプール開放や、歯磨き調べなど子どもたちの健康と安全を見守っています。

学年委員会

ベルマーク運動と年三回の学年懇談会の内容調整などを行っております。

校外指導委員会

子どもたちが安心、安全に生活が出来るよう、パトロールや交通指導を地域の方々と一緒に見守っています。

また、興文校区青少年育成推進会と一緒に、地域を流れる水門川の護岸や河川清掃を行っています。

広報委員会

年四回発行している広報誌「興文小会報」の作製・配布をしております。PTA活動や子どもたちの取り組みなどを分かりやすく紹介し、広報誌を通じて多くの方に情報を共有していただけるよう活動しています。

その他

地区センター祭りでは、綿菓子やポップコーンを来場者にお渡しするなど、地域のイベントに積極的に参加しています。

PTAとは仲間づくり

PTA活動に参加する事は親自身の成長に繋がっていると感じています。一つひとつ行事に関わるたびに、自分一人ではない、皆のおかげでと感謝する心が芽生えます。これからも、教育支援の必要性、子どもたちの成長を身近に感じるごと、地域社会との関わりなど大切に、学校、家庭、地域が一体となって学校教育に取り組んでいきたいと思います。また、興文小学校の伝統と歴史を守りながら現代に適応したPTAを模索し、仲間と共に想像力と行動力でチャレンジしていきます。